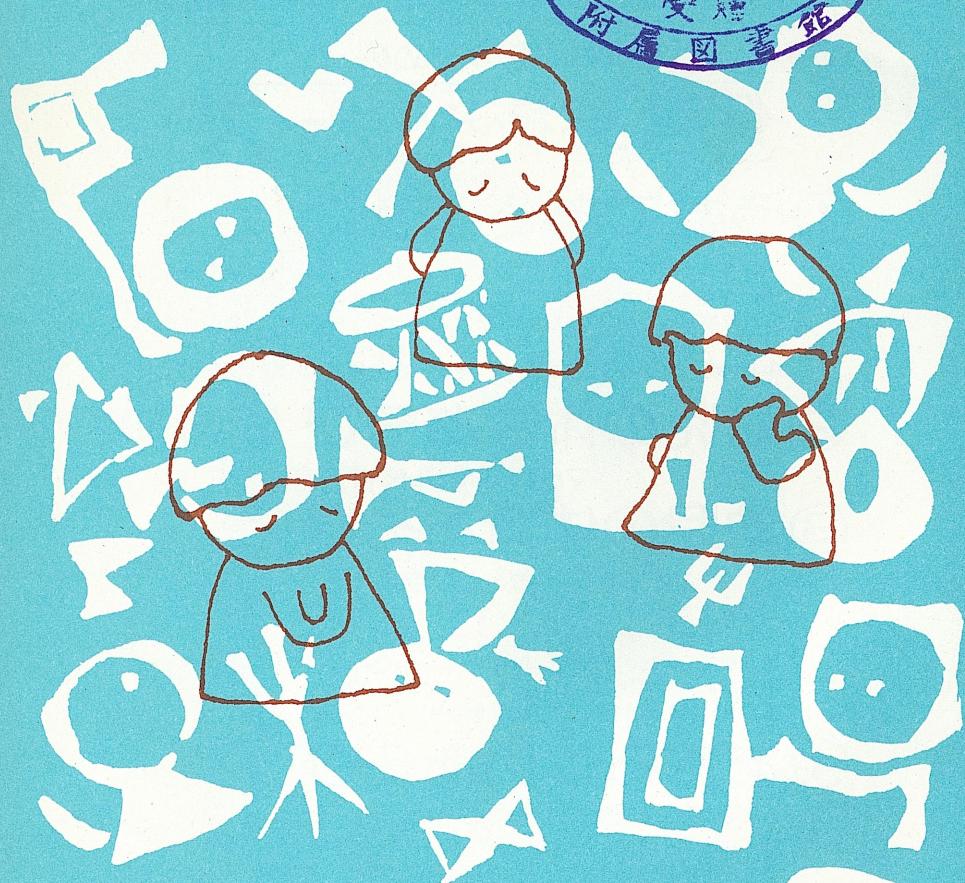
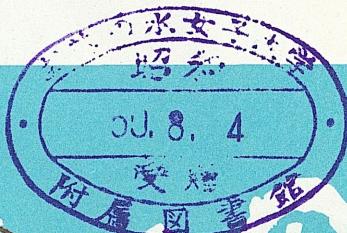


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



日々の保育指導にすぐ役立ちます。-



新シリーズ

保育者ための 保育実技シリーズ

①うたであそぼう

子どもの音楽遊びを、歌唱中心から、手あそび、おどり、楽器演奏、音楽に合わせての運動遊びなどに発展させた解説書。掲載32曲は、よく知られた曲ばかりで、豊富な図説と、ていねいな解説とで、指導の参考になるよう工夫されています。

中村 明・早川史郎・関口 準 共著 B5判・128頁 1,000円

②幼児の体育あそび1 (近刊)

マット・ボール編

③幼児の体育あそび2

なわ・平均台・とび箱編

「なわ」、「平均台」、「とび箱」をとり上げ、これらを利用しながら、子どもの敏捷性、瞬発力、巧緻性などを培うことを目的とし、子どもの心理の把握、導入のしかた、保育者の心がまえなど、豊富な図説により、微細にわたり解説されています。

三宅照子著 B5判・128頁 1,000円

④あたらしいあそび

幼児の安全能力を育てるために

新しく考案した楽しい遊びを通して、幼児の安全能力を培うことを目的とし、実技指導をはじめ、年間の保育計画案や、基礎的な理論づけまで紹介した期待の書。幅広く、即役立つ指導書です。

幼児の安全保育研究会編著 B5判・132頁 1,000円 (以下続刊)

幼児の教育

第七十四卷 第九号





幼児の教育 目次

—第七十四卷 九月号—

表紙 三好 碩也
カット 中島 英子

- | | |
|---------------------|------------|
| 太鼓打ち | 木島 始 (4) |
| 「子どもの見かた」の意義 | 鬼丸 吉弘 (6) |
| 私の幼児教育論 X 保育の基本 (V) | 神沢 良輔 (11) |
| 問題児の幼児期 | |
| —登校拒否児を中心に— | 篠崎 忠男 (15) |
| たちどまる | 芝 恭子 (22) |
| たちどまる | 伊豆山明子 (24) |



さあ 幼稚園よ.....
私の保育のはじまり

ーあたらしく入って来た子どもたちをめぐってー

.....石川 章子 (34)
二学期を迎える新入園児について思う.....西 本 美 節 (38)

私にとっての保育のはじまり

ー子どもたちの動きに一時代の音楽を期待するー.....松 沢 孝 博 (42)

私の保育のはじまり

ーあたらしく入った子どもをめぐってー.....小野 真理子 (45)

幼児と音楽.....

.....神 礼 子 (51)

岡先生とおはなしえほん

ー岡 政先生を悼むー

.....後 藤 千 枝 (55)

マリアさんを再びお迎えして

.....赤 間 峰 子 (60)

編集委員 勝部真長・村石京子

守永英子・本田和子

編集主任 津守 真・水田順子

太鼓打ち

木島

始

祭り太鼓は呼びさましてゐる

父の古いふるい記憶から

タンタンタンタンタンタタンタタン

たぐれば果しない森の足跡
消えた狐のちらり飛び



祭り太鼓は呼びおこしてゐる

母のうたたねを不意打ちし

タンタンタンタンタタンタタン

駆けめぐる夢のなわとびくらべ

くぐりぬける扉また扉

祭り太鼓は打ちならしてゐる

子どもの今をひっぱる拍子

タンタンタンタンタタンタタン

すげえつやつでかけよおやつ

掛け声ぜんぶ叩きだし

〈子どもの見かた〉の意義

鬼 丸 吉 弘

子どもの描きかたが、おとなとの描きかたとたいへん違つてゐるという事実は、誰しも認めるところです。ではその違いがどうしてできるのかということになりますと、たいていのおとなはそれを、子どもの幼稚・未熟なせいにしています。つまりこの考え方では、子どもはおとなにくらべ、身体的にも精神的にも未発達な状態なので、観察力や表現力がおとな様にいかないのだというのです。そこで子どもにおとなの見る様な見かたを教え、ママやパパ、おうち、自動車、ワンワン等々のものを、描かせたり描いてみせるのは世間でよく見る光景です。

ですがはたしてそれでよいのでしょうか。

子どもの描きかたはおとなのそれを、ただへたにしたにすぎないものなのでしょうか。

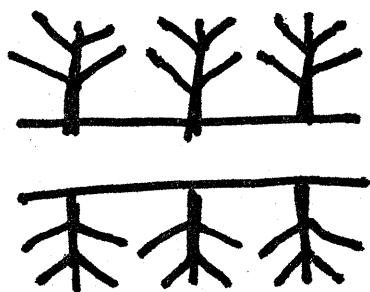
たしかに子どもの絵には、おとなにくらべて身体的・精神的な未熟さから來て いると思われる要素がないわけではありません。線の不確かさや構図や技法の單純さなどは、多くの児童画の中にごくふつうに見られることであり、そこから、ただ「おとなをへたにした子ども」という観念も出てくるのでしょう。しかし子どもとおとなの絵の間には、それにもかかわらず、もっと本質的な違いが存在しています。そしてこの「本質的な違い」を多くのおとなが見誤り、これ

も子どもが「へた」なためにそうなったのだと思ふところに、大きな問題があるのです。

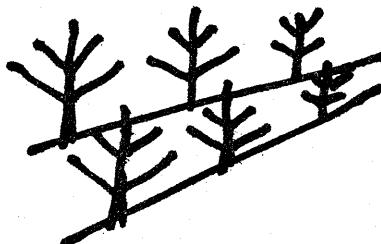
子どもとおとなとの本質的な違いを、たいへん明瞭に示している例は、たとえば「並木道」の描きかたです。おとなはふつうこのテーマを、たいてい斜の構図で描いて、道はばが奥に向ってせばまつて行くと同時に、両側の並木を近くから遠くへ、順次に小さくして行くでしょう（図一）。しかし幼児がこれを一般に、道路は同じはばで現わして、その両側に並木を、それぞれ押し倒した様なしかたで描くことはよく知られています（図二）。研究者の間で、ふつう「折り返し」と呼ばれている、あの描きかたです。

おとなと子どものとの、この二つの描きかたの違いは、原理的に考えるならじつは、対象との間に距離を置いて客観的にものを見ようとする態度と、対象に近づいて、あたかも手でじかに触れる様な気持でものを見る、態度の違ひから来ているということは、昨年の本誌（七三巻）で説明しておきました。前者を「遠視」、後者を「近視」と呼んでいますが、あるいは「視覚的」と「触覚的」と言つてもさしつかえありません。というのは前者は、いわばふつうの意味での目の物理的機能に忠実な見かたと言えるのに対し、後者は、たとえば盲人の手さぐりの見かたに近いからです。

ところで今回考えてみたいと思うのは、子どものこの様な表現法の、価値の問題です。はたして（図二）の表現は、（図一）にくらべて幼稚な表現なのでしょうか。言いかえると価値の劣った表現法でしょうか。



（図二）



（図一）

そうではありません。

というのは、(図一)の並木は、たしかに並木道のある距離から眺めた全貌がたいへんよくとらえられてはいるのですが、ひるがえって一つ一つの木について見るならば、この方法では、最も近い木だけを一応はっきりと現わすことができるだけで、他は一つ一つ、それから離れれば離れるほど、ますます小さく、表現が不明瞭になって行かねばなりません。これに反して(図二)の見かたは、全体像としてはじつさしいに見られた状態とかなり違ったものになつてはいますが、一つ一つの木は逆に、この描きかたによつて、正確にその状態を伝達することができます。

つまり二つの表現法には、それぞれ一長一短あるのです。全体を一目で見わたすためには前者の方が適当かもしませんが、個々のものを正確につかまえようとすると、後者の方が断然すぐれています。そうすると当然、二つをくらべて、どちらが高級でどちらが低級という様なことは、まったく言えないことになるでしょう。

ところで私たちは、ものを観察しようとする場合に、一方では個々の部分をすみすみまでくわしく知りたいと思うと同時に、他方ではまた、全体を一目で掌握したいという欲求をもつものです。しかし部分をよく見るためには接近することが必要ですし、全体を掌握するためには、離れて観察しなくてはなりません。ですが対象を完全に正しく認識するために、この相反する二つの見かたを併用する必要があり、現実には私たちはそれを実行していると言つてさしつかえないのです。ところが絵の世界では残念なことに、両者を十分満足させる様な表現法は、どこにも存在しません。それは画面の二次元性の制約によるのでして、一方の条件を満足させようとすれば他方は、どうしてもかなりの犠牲を余儀なくさせられるのです。そう言うとなにかこのことが、絵画といふものの本質的な欠陥の様に受けとるかたもあるかもしれません。そうではなく、この制約が逆にそのじつ絵画の、芸術としての偉大な創造性につながるのです。ですがこの点に立ち入ることは、本稿の主題を離れるおそれがありますので、さしあたり以上の指摘で止めておきます。
さてこの二つの見かたが、価値の点では優劣がなく、しかも相互に立場の違う見かただとしますと、当然にここである場合にその一方が、他の場合には他方が、選択されるということが起ります。じつさい歴史をたどりますと、時代に

よつて支配的な〈見かた〉に変化があつたのです。

すなわち絵は、たとえば古代のエジプトや中世のヨーロッパでは、近視的に描かれていました。それ故そこではいたるところ、子どもの描きかたと共に通するものが見いだされるのです。これに反して古代のギリシャやローマ時代、それにルネッサンスから後の近世ヨーロッパでは、遠視的な傾向が優勢でした。そして美術史の世界でもついさきごろまで、子どもの絵を幼稚・未熟でかたづけたと同じ考え方から、古代エジプトや中世の絵の藝術的価値を、否定していたのでした。しかし考へてもみてください。あの巨大なピラミッドを建設した古代エジプト人、偉大な石の大聖堂をつぎつぎに築き上げた中世の人びとの絵を、幼稚や野蛮という言葉でかたづけるということは、なんという不当な考え方かたでしようか。

識者の間でさえ子どもの絵が、価値の乏しいものとして無視され、否定され、つねにおとなしの手によつて修正されねばならない対象として扱われてきたのは、つい近年までのことでした。その背景には、まさにルネッサンス以来の、長い〈遠視〉の伝統があつたのです。私たちはあまりにも遠視の伝統に馴れすぎていきました。そして遠視が、〈正しい〉ものの見かたであるかの如き誤謬にとりつかれていたのです。

しかしこの誤った信仰は、二十世紀に入つて、ほかならぬ絵画という世界そのものの内側から、崩壊して行きます。というのは今世紀の偉大な画家たち、たとえばピカソやクレーを思い浮べると明らかのことですが、これらの大作家たちの絵はしばしば、子どもに似ていると言われます。どこが似ているのでしょうか。なによりも近視的表現法がふだん人に用いられているところがそれです。たとえばピカソの人物画に、横顔で正面向きの目のつくものが少なくありません。これは幼児が好んで描くところとして、近接してものを見たときの様に、ある部分は正面から、他の部分は側面から眺めて、それらを一つの画面に総合したものです。またよく長方形のはずのテーブルが台形にゆがみ、奇妙な方向に脚が出ています。小学校の低学年児がよく食卓を描くのに苦労して、奇妙な解決法を行なつてゐるのを見かけますが、ピカソのテーブルは原理的に言つて、この小学一・二年生の食卓と同じです。子どもの場合は遠視で表現できないため

そうなるのですが、ピカソは遠視の表現法を十分承知で、そう描かないのです。理由は遠視では、自分の表現したい内容を十分現わせないと考えたからにほかなりません。

ここからピカソと子どもの違いもまた明らかになるはずです。原理に還元すれば両者の表現形式はたしかに基本的には同一なのですが、子どもは幼少期における発達の必然的段階として、自然にそれを行なうのに対し、ピカソは複雑な現代人の心理を現わすために、意図的にそれを活用するのです。ですから私たちは子どもの絵を、ある面で似ているからと言って現代美術家の作品と同種に見なすわけにはいかないし、幼稚なものとして否定や修正の対象とする事もできないのです。

子どもは自分では意識することのない内的必然性にうながされて、〈近視〉でものを見ます。そしていくつかの段階を経過生長しつつ客観的な見かた、〈遠視〉に近づくのです。その場合発達の過程は文字どおり〈階段〉に似ており、一つの段階からつきの段階への躍進は、創造的飛躍によつてのみ可能です。創造という飛躍、断崖を越える力はどこから来るのでしょうか。ただ現段階の習熟ということがあるにすぎません。現在の表現形式に習熟して、もはやそのしたでは満足できなくなつたときに、はじめてその子の目に表現の新しい地平が開けるのです。ですから短絡は無意味であり、創造の芽を枯らすことであり、幼少期に経過すべく命づけられている、人間として必要な基礎的体験を奪うことによって、その子の人間性に深い傷痕を残すのです。

私たちは、子どもに特有な見かたというものが、それ自体正当な権利をもつものであり、存在すべくして存在しているのだということを、常に忘れぬ様にしたいと思います。

(北海道教育大学)

私の幼児教育論 X

神沢良輔

三 保育の基本(八)

— 幼児とのかかわり合いの中で —

(x) 保育者は、すべての幼児たちの活動のみられる位置にいる

(1)

保育者がいるということで、幼児たちは安定して活動にとりくむことができるし、それを通して発達していく。

それは、これまでみてきたように、ひとりひとりの幼児は、保育者に自分自身を受容されたいと願つてゐるからであるし、受容されることによつて安定していくことになるからである。また、安定していることにより、幼児は自己を表現すると

いうことが可能になり、集中して活動にとりくみ、それによつて発達するということになろう。

そのため、保育者は、ひとりひとりの幼児と、いつでもかかわりのもてるよう、自分のいる位置について、常に留意する必要がある。換言すれば、保育者は、すべての幼児たちの活動しているようすが見やすい場所に位置するよう常に留意することがないせつであるということになろう。といつても、それは特定の場所があるというわけではなく、幼児たちの活動の状態によって異なることはいうまでもない。

つまり、幼児との朝の出会い、幼児たちが自ら選んだ活動とりくむとき、活動が広がつていろいろなコーナーに分かれたとき、さらにそれがテラスや室外にまで拡大したとき、また学級全体の活動が中心になつたときなどさまざまであらう。

しかも、実践的具体的な場においては、毎日毎日のようすが必

ずしも一定しているわけではないし、また、一日の保育の流れの中でも、またもつと短い時間を持つても、それは時々刻々と変化しているであろうし、ときには瞬間に変化するということだつてあるだろう。

だから、今までなく、"すべての児童たちのみられる位置にいる"といつても、それには決った場所があるというわけではもちろんない。それは、保育者が児童たちとの保育の実践的具体的な場において判断するということになる。

(2)

保育者の位置については、私のような幼稚園への闖入者にとっては、誠に気になることであった。

それは、ひとつには、自分自身が保育室において占める位置がわからないということのためである。つまり、児童たちの活動のようすはみたいのだが、私が入ったことで保育の邪魔になつたら申しわけないし、どこに位置していたらもつともよいかということ、いつも迷うということのためである。

だから、私にとっては、児童の活動の全體のようすを一べつすると、すぐ保育者がどこに位置しているかということをみつける

ことが、たいせつなことになるのである。といつても、私自身の判断のあまさから、實際には保育の邪魔になつたことの方が多いのであろうが、氣をつけて、自分の占めてよいと思われる空間をさがしただけは、了とされたいということになる。
でも、児童の活動をみていくと、逆に、保育者の位置に疑問をもつとも、ときにはあるのである。

(3)

そこで、これらのことについて、もう少し具体的にみていくたい。

まず、朝の出会いにおいては、保育者はひとりひとり児童を出迎え、人間関係に入るために、児童が登園してきたとき、登園した児童と目があうとともに、児童が保育者のいることが確認しやすい位置にいることが望ましいだらうし、出会いの終つた児童たちの、毎朝くり返される、基本的な生活習慣の状態——下靴と上靴のとりかえ、かばんの整理、通園服と作業服のとりかえ、手洗い、うがいなど——も見え、出会いが終つてコーナーで活動している児童たちや、運動場にいる児童たちの活動も見える位置が望ましいということにならう。また、このように出会いのときは、

できるだけ場所をかえずに、ゆったりした感じが幼児にも通じるようでありたい。それは、登園直後ではコーナーや運動場にいる幼児たちは、本気になって活動にとりこんでいるが、大部分の幼児たちは、保育者との関係や承認を求めて、自分のしたい活動を模索しているという状態にある幼児も多いのであるからである。

だから、保育者の位置が変わり、保育者の姿がみえないときには安定感をなくし、保育者のいるまわりへきたり、活動への集中性がなくなったりして、それがクラス全体にも影響を及ぼして、全体が不安定な行動になる場合も多いということでもある。

また、落ち着いて出会いのためには、前日に必要な環境の準備をしておくとともに、出会いの最中に準備不足のために不用意に動くということのないようにしておく必要がある。朝の出会いのとき、保育者が動くことによって、そのあとの一日の保育全体が失敗したという例は余りにも多いのである。

(4)

幼児たちがコーナーにわかれたり、運動場で活動するというときの保育者の位置については誠にむずかしい問題が多い。

コーナーでの活動の指導では、できれば、すべてのコーナーの幼

活動について、見てあげることはよいことであるし、コーナーで、幼児とともに活動することはもつとよいことである。できれば保育者は、参加しないコーナーのないように心がけることもたいたせつである。

しかし、この場合もつともたいせつなことは、すべての幼児たちの活動が見られる位置に坐って、コーナーの活動に参加するということである。もちろん、このような場を占めようと思つても、その場所で幼児たちが活動していたりして必ずしもうまくいかない場合もある。そのような場合には、幼児の動きを見ながら、望ましい場所へ機会をみて移れるようにすべきである。といつて性急に場所を移動することは、コーナーにいる幼児たちの雰囲気に悪い影響を与えることも多いので、十分に留意する必要がある。

また、ひとつつのコーナーから他のコーナーへ移る場合でも、保育者のいるコーナーの幼児たちに、安定感をもつて活動にとりくめるようにしてから、ゆっくり、次に予定しているコーナーに移るようにしてから、ゆっくり、次に予定しているコーナーに移るようになることがたいせつである。そのためには、一つのコーナーに原則として二十分ぐらいはいるようにするとともに、移る機会を見落さないようにする必要があろう。

保育者が別のコーナーに移った場合に、前にいたコーナーの幼

児たちの活動の水準が低下したり、保育者の移ったコーナーに追つかけてくるというようでは、移り方に問題があつたということにならう。

(5)

幼児たちの活動は保育室だけでなく、当然運動場へも拡大していく。そして、保育者にとって、"すべての幼児たちの見える位置にいる"ということは、物理的には不可能になつてくる場合もでこよう。

こうなると、保育者にとっては、保育室か運動場か、または、その他の幼児の多くのいる場所かのどこにいるのが最もよいかといふ判断に迫られるということになる。これは、保育者にとって、もっとも大きな決断を要する事態である。でも保育者は、どこへ動くにしても、やはり"すべての幼児の見える位置にいなくてはならない"ということになる。

それは、保育者が現実にすべての幼児に見える場所にいなくてはならないと全く同じような状態を持続するということである。そのためには、保育者は、ひとつずつ幼児たちのグループから離れるときには、行先をそのグループの幼児たちにはつきり知ら

せておくとともに、必要があれば、離れなければならない理由を幼児たちに納得させておくべきである。またこのようなことは、いかに忙しくても必ず実行すべきである。

"先生は、○○にいるからね"といって、別の場所に移動すれば、そこにいる幼児たちも、そこに行けば保育者がいるということで、安定して活動にとりくむことができるであろう。

また、活動が拡大していくと、保育者の見えない所で活動する幼児もでてくる。ときには、保育者から見えない秘密の場所でのびのびと活動することにより、満足したいという要求も幼児のかにはみられる。だから、保育者は、このような、保育者の見えない所にいる幼児の活動についても、そこで何がなされているかということについて、心の眼を通して見えるようになることがたいせつであるし、そこにある幼児たちの活動についても理解してやることがたいせつである。

このように、実際の保育においては、いろいろの問題はあるにしても、現実には見えない幼児の活動をも含め、保育者は、すべての幼児の活動の見える位置にいなくてはならないということにならう。

つまりは、保育者は、ひとりひとりの幼児と、見えない心の糸で結びついていなければいけないということになる。（曉短期大学）

問題児の幼児期

——登校拒否児を中心には——

篠崎忠男

小学生以上の問題児が幼児期にどんな状態であったかという問題について、具体的な事例に即して考えてみよう。

(1) D君の場合

D君が高校へ行きたがらなくなつたのは、二年生の二学期であつた。彼は夏休み中にいつものように宿題をやらないでいた。彼にとって学校とか勉強というものは、どういうものか、ものういものであつた。クラスメイトのBとかNとかが、まるで一分の時間も惜しいというように参考書やノートにしがみついている気が、彼には理解できなかつた。夏休み中、自分の家で、気ままに思つた。それだけがはつきり残つた。

二学期からDの登校拒否が始まつた。父の知り合いのカウンセラーがきた。彼はDと雑談して、五目並べをして帰つた。翌日から登校したが、そのうちまた休み始めた。体育の時間のある日が多くつた。母がカウンセラーの所に通つた。登校はだんだん楽にしていられるることは楽しかつた。サラリーマンの父は朝は早く出て、夜は大がい遅く帰つてきた。そういう父も大へんことだら

その幼児期など

Dが生まれた時、両親にとって初めての子なので大事にされた。元気であった。しかし二歳で小児ゼンソクを起してから、周囲の事情が変り出した。両親ことに母が心配し出したからである。症状がひどくなると夜中でも医師のもとに走った。また三歳で脚を折った。三ヶ月入院し、その後もしばらくマッサージに通つた。その後は「ケガをさせまい」という気持が家族につよくなり、過保護がひどくなつた。また、母は職業をもつていて、一日間は祖母に世話をされた。祖母は面倒がよすぎる位であった。妹と六歳の差があり、妹が生まれるまで一人っ子として大事にされた。

幼稚園では折った脚が十分治っていないで不自由というだけで、登園を嫌がるということはなかった。ただ友だちらしい友だちがなかつた。内気で不活発な子になつていた。

(2) J君の場合

J君は中学一年生である。小学生の時転校し一度登校拒否をしたが、親子でカウンセリングをうけに通い、また、ゼンソクのために入院して規則正しい生活を身につけて帰つたりして、通学

するようになった。中学一年になり一学期は大した休みもなく登校したが、二学期になると余り行かなくなり、十二月には一回登校したきりであった。

その頃のJ君の気持は、父や母とは大いにくい違つていた。母は学校へ行かぬと将来のことを、はつきり考えた訳ではないが、心配で心配でたまらず、中学を卒業しない人間が自分の家庭にできるなんてありえないし、あつてはいけないよう思えた。だからつい、「そんなんにしてるんなら、勉強したらどうなの」「学校のことどう思つてんの」「学校じゃ来週から中間テストだってよ」と言つてしまつことがよくあつた。初めは反発も口頭でかえつてきたが、この頃は、暴力が入る。何も恐れるものなしといった傍若無人ぶりに、母には見える。「学校」「勉強」という言葉が父か母の口からでる。スリッパがとび、枕がとび、ガラスに文鎮がとんでゆき破壊音をたてた。前からきびしい父が、こんなことが許せるものかと腕力で立ち向つても、効果はなく、かえつて荒れを増すばかりだから、理性で自己統御している。親の立場もつらいものだと思う。

Jにしてみれば、学校も、勉強も大したことじゃないのだ。自分はもっと大へんな苦しみをもつてているのだ、と心の底の方で感じていた。感じてはいたが、それが何であり、何事であるのかは

まるつきり判らない。ただ、それは学校や勉強や、そして、友人や先生や、父や母や、妹などとは別の次元のものだと体のどこかで判つているようなものだった。自分でもそれをつかまえることはできなかつたが、そういうものがあることに気づこうとせず、外側の学校、勉強、法律、就職のことなどからばかりみている親たちの言葉には耳を覆いたくなつた。Jはそういうことを言われると、傷口をえぐられるような激痛を感じるのだ。だから自らを守るために、彼は相手の口を封じようとする。ガラスを割る、母を叩く——腹立ちの余りやつたことが効果的であると知つてから

は、すぐその手段を用いた。父や母の絶望的な困惑と驚愕の表情は、Jに最初は快い驚きであったが、自分のやつている行動の意味が通じないことに、いい知れぬ絶望とある悔いを感じていた。

母の知人の紹介で三時間ほど電車にのつて、Jはあるカウンセラーに通つた。Jの暴力はなくなり、落つきが出て、遊びにきた友人を拒否していたのに、遊ぶようになり、やがて登校した。Jが四回カウンセリングに通つたあとに登校できたのであった。回復ははやい方であった。

その幼児期など

Jは胎内中、出生など普通であり、発語が少し遅かったほかとく

に変つたことなく発育したが、三歳の時にゼンソクを、なんらきつかけと思われるものもなく、突然におこした。このために両親は心をつかうようになり、過保護になり、彼はわがままな傾向をもち、思い通りにしようどし、思い通りにならないとカッとなる癖があつた。幼稚園に二年間通つたが、入った年の六月にリューマチになり、一年ほど医者に通つた。幼稚園では不活発で、受身的だが、自己中心的な所があつた。

(3) M君の場合

M君の登校拒否は、自分では、口端のおできを気にすることから始まつたと思っていた。口端のおできを、クラスの皆が注視しているように思つた。そのうち、家の近所の人々が、そのおできをじろじろみているような気がした。しかし彼は、相手の人が、通りすがりに自分の口端のおできを注視した瞬間を、自ら確かめたことはない。しかし確かめたと同じように、いや、相手から直接に、「あなたの口端のおでき、みつともないわねえ。そんなみつともないものをつけて、よくもこのまゝ昼間の大道を、顔をあげて歩けるわねえ」とさげすみと、いわれのない非難と、冷笑の言葉をあびせられたのだと確信しているのであった。もちろん彼は

そういう言葉を耳にしたことがないことは知っている。しかし彼は、自分は、人の気持を、言葉をきかないでも、相手の目をみないでも、敏感に感じとれる敏感さをもつてていると思いこんでいた。

彼は父は出張がちであるし、母親が勤めにでるのを幸い、いつものように登校するとみせては、学校へゆかずに戻ってきた。その中、そういう面倒な手順を省略して、彼は登校をしなくなつた。彼は言葉で反発はしたが、乱暴はしなかつた。

母はカウンセラーを訪ねた。間もなく彼は登校しはじめ、だんだん休むことも減少してきた。しかし彼の自我には弱いところがあり、未発達の部分が多いし、ある種の不安があるから、彼自身カウンセリングをうけることをすすめられて、ある期間カウンセリングをうけた。だんだん彼の問題は少なくなつて行つた。

その幼児期など

Mは一歳の時に養子にきて、今の家庭で成長してきた。大事に育てられた。幼稚園へは余りゆきたがらず、よく休んだ。集団の中におけることは、一人遊びの方が多い。

(4) B君の場合

B君の登校拒否は中学二年の五月から始まつた。彼の心ではもと前から何か変わったうじきがおこっていたが、彼には意識されなかつた。それが最近、重みとして感じさせられてきたのだ。学校へ行く気持が、その重みによつてひきとめられる感じであつた。初めは行つたり行かなかつたりしていたが、そのうち、まったく行かなくなつた。父は担任に相談した。神経科の医師にみてもらつた。カウンセラーにも相談した。Bが再登校したのは、一年余りを過ぎてからであつた。

B君のばあい、父はBに対し理解的な態度に終始した。Bのたつた一人の兄はかつて躁病と診断されて入院したことがあり、今は勤めに出たり、やめたり、家業を手伝つたり、ぶらぶらしたりしていた。その事について、彼は格別の心配はしていないつもりであった。兄のことは、父や母に一切まかしていられるつもりでいた。しかし、心の中の意識のどかぬ所では、兄を苦しめた何か正体の判らぬものが、自分の行く手に、突然にあらわれ、自分の進路をがっかりとふさいでしまうおそれがあつた。それは彼の描いた絵画にしばしばあらわれていた。絵画の中には劣等感も表出されていた。そのような心の中の「彼を苦しめるもの」は、心

の外に表出されることによって、その無意識的支配力を弱めていった。

彼も暴力を振うことはなかった。父親が理解的態度で接したのもその一因であろう。

その幼児期など

彼が登校拒否を起すまで、彼は友人に好かれる人物であった。

小学校でも、対人関係のよい子であった。幼稚園へは行かなかつたが、近くの子とは遊んだし、特に問題のない子であった。父は子どもに対し理解的態度であり、素朴、正直、勤勉の特性をもつた人物であった。母は気さくで、気に入つても入らなくとも、あけっぴろげに感情をあらわしがちであった。

(5) Sさんの場合

その幼児期など

Sさんはばあいはいわゆる登校拒否ではない。高校三年生になつて自分の進路についての悩みがつよくなり、しばしば学校を休んだのである。彼女の悩みの一つは成績が自分の思ったよう向上しないことであった。第二は、友人たちとの関係がよくないことがあった。友人とはグループづきあいだが、それが彼女にはう

まくゆかなかつた。第三に近ごろ、体が太つてきたことで容姿を気にしていた。これは大して気にしない子もいるが、Sにはなかなか決定的な大欠点のように思えてしようがないのであった。成績の点ではいっそ今のうちに三流校に転校しようかと本気で思い悩んでいたのであつた。

両親はカウンセラーを紹介され、Sは二回、カウンセリングをうけた。そのカウンセリングの中でも考え、そのあと自分でも考え、彼はSを見直すところもあつた。S自身もカウンセリングの中で自分の考えが整理され、帰つてきても、一人でとつおいつ同じ所で考えあぐんでいたのと違つて、なんとなく自分の考え方、自分の力で先へ先へと少しずつ進むようであつた。そして、二期から通学するようになつた。

その幼児期など

Sさんは特に目立つことなく、誕生、生育したが、三歳で肺炎を病んだ。第一子のため大事にされて、自己主張は強かつた。友だちは特定の仲よしができると、その子とばかり遊んで他の友だちは遊ばなかつた。たつた一人の弟（中一）との間に特に問題はなかつた。

(6) 問題点を考える

これまでに五つの例をみた。その叙述にはその人物の主観的な内面の世界が如実にわかるよう、共感的に推察して書いたところもいくつかある。（それがもし事実とすれば、筆者は誤りというほかはない。しかしその中の多くは、カウンセリングの記録や、カウンセリングの中で得られた材料——たとえば、Bの描いた数十枚の絵画などに依拠している）多くの問題児のうちのたった五つの例から、何か結論めいたものを引き出そうとしても、それは無理なことである。しかし多くの他の例と同じようなことを、恰も一つの例が代表するかのように、何事かを私たちにそれとなく示していることもある。また各事例は個性的ではあるが、又共通性をも示しているものもある。そこで共通性をそれとなく示しているのを探ろう。

(a) 幼児期に必ずしも、その後の問題児の手がかりを見出しえない。——これはB君のようなことがあるからである。そのほかにもこれに似た例はあるのである。ここに詳細にすることをしなかった、高一生のN君のばあいは、幼稚園時代は大へん元気に活動していた子であった。——これに対しては一般的な対策をと

- (b) 子どもの健全な自我を育てることに着眼しなかったこと——子どもの自主性、自立性、自発性、責任性、決断力などを育成することをおろそかにしたこと。
- (c) 自我の未発達、歪んだ又は偏った発達のことが多い——原因は親の過保護、過度の心配、子の誤った主張を許容したこと、——これに対しても対策が必要である。
- (d) 子どもの精神的生命（リアル・セルフ）に目をつけてそれ

るほかないであろう。

(b) それにも拘らず、幼児期に何らかの問題をもつたものが、それと類似か二次的に他の問題をひきおこすことがある。……DとJは小児ゼンソクをもっていたし、このことが二次的に性格的な歪みを与えていた。Mの場合は実父母を離れ、養家に育つという心理的環境の大きな変動があり、Sの場合は、強い自己主張と狭い交友の問題は後におこった友人との関係不良と同質の問題であつた。他にも似た例は多い。——これに対する対策が必要である。

を育成することに気付かなかつたこと。

——この(4)(5)については一般的対策として、広い観点より実施する必要がある。

(7) 幼児期の教育でしたいこと

ここでとりあげたのは小学生以上の問題児の幼児期であるが、幼児期にすでに問題児である子どももいる。そういうものはすでに問題をあらわにしているので対策しやすいし、対策しているであらう。しかし見逃しということもあるので用心したい。

(6)の(6)(7)に対しては健全な自我を発達させないための対策が必要なことを前記したが、それはむしろ(6)の健全な発達させるところによって自然に行なわれる部分があるので、以下、(4)(5)について的一般的対策を述べる。

以上、不十分ながら、何とか問題児に関連して、教育の上で、又人間の生きる問題の上で、大事なことを考えてしめた。ご参考になるところがあれば幸である。

(むさし心理研究所)

(1) 健全な自我（自主性、自立性、自発性、責任性、決断力など）の育成——この中一つについて述べよう。自主性は、まず子どもの内部に自主性が潜在すると大人（教師・親）が認める。そしてそのことが子どもにも判るように言葉で伝える。次に自主性に向つてつねに話しかけ、それが働いたら、働いたその時に子ど

もに伝達する。くり返すと、子どもは自立性の働きに歓喜を覚えてくる。他も同様である。

(II) 精神的生命（リアル・セルフ）の育成——あなたの心の底

の底にある、だれに言つてもどこに出しても通用し、その人を生かし、他の人をもついては生かすものがそれである。そういうもののあることを思い（少なくとも子どもに対する時はそう努力する）、そのものが、それにひそかに焦点をあてて見、聞きとり、努力することによって成長するのをみつめてゆく。やがて子どもは子どもながらに、生き生きとおのが生命を生きていることが、わかってくる。（それをみつめることを忘れて、学業成績や、エリート・コースや、身体的健全や、世俗的幸福にばかり焦点をおくとき、問題が発生しやすくなつてくる）

たちどまる



芝 恭 子

あれは昨年、日差しがいよいよ盛夏の到来を思わせる、そんな日のことであった。私は仕事で訪れた幼稚園から急ぎ勤務先に帰るべく、足はやにバス停に向っているところだった。私の前には、昼食のための買物か手提を持ち、これまでかなり性急な足取りで進む一人の婦人がおり、さらにつと路地の片側に寄るとそこにしゃがみ、その前には、その婦人の連れとおぼしい三歳くらいの女の子が、ぱたぱたと駆け足で先頭を切っていた。はたから眺めたら、ちょうど昔話にある追い掛けっこの一こまのようだつたうとは、今私自身がその光景を想起して思うことであるが、その光景 자체はごくありふれたもので、もし次のような場面が展開しなければ、とうに私の脳裏から消え去つていたに違いない。

クチナシであった。金網の内側に丈二十七センチもないクチナシの一枝が、いかにも唐突な取り合せでさし木されていたのである。子どもはクチナシの小枝に目を凝らし、白い花びらに鼻を向けた。「クチナシよ」とひとこと、婦人は静かに言うと、荒い金網の目に指を差し入れ、クチナシの花を一つ注意深く支えて、そーっと子どもの方に引き寄せた。と言うより、子どもがみずから足を止め心を開き、つた様子で子どもに近づいた。私は私で職業柄、なぜ子ども

きて、二人の先達は私をやや引き離し、あと数メートルで大通り裏のその路地を出るという所で、女の子が急に立ちどまつたのである。婦人は歩みを緩め、どうしたのといふた様子で子どもに近づいた。私は私で職業柄、なぜ子ど

もが急停止したかを知りたくて、何気ない風をよそおいながら神経は子どもに集中させ、急にゆるゆると進んで行った。子どもは、つと路地の片側に寄るとそこにしゃがみ、（それは私たちの右手であったが）延々と張りめぐらしてあるゴルフ練習場の金網をのぞき込んだ。婦人が子どもの背にかぶさるようにうずくまり、私は二人の二、三歩後まで来ていた。と、私はほのかな花の香りをかいだような気がした。

けて送り込むしぐさと私は見えた。婦人はそのまま身じろぎもせず、ただ目と口元から微笑が溢れた。子どもは肩を上げて息を吸い、目前の世界に自分自身のすべてを動員して向い合う様子だった。思考も感覚も魂も。私はこのじまに息をのんだ。つい数秒前まで婦人の身邊を包んでいたリズムと雰囲気が急激であつただけに、ゆつたりとして優しいこのじまを現実かと私は驚き、そして打たれたのである。子どもの声がした。「こんどはママも。さあクチナシ」子どもは立ち上っていた。促されて花の香をめでる母親の横顔を、私はあらためてためらいもなく見た。化粧のない地味な顔立ちだった。そして一方、生き生きと聰明な表情であった。私は計らずも遭遇したこの空間に名残りを惜しみつつ、二人がこちらに向かないうちに歩き出した。

聰明であれ。おとなたちよ聰明であれと、私は自他ともに願う。奔流のような現代に生きる私たちこそ、人がたちどまることの意味を再認識しなければならない。わけても子どもたちがたちどまる意味と、その時おとなとの果すべき役割を知るために聰明でありたい。おとなは意志して、たゞどまり、おのが姿に目を向ける。そしてある時は内省しあ

る時は養い、またある時は励むのだ。多くの場合、おとなたちどまりは内なる行為である。ところが子どもは、ほんとんど反射的にたちどまり、自分を引き付けた対象に全人格を注ぐ。そして思考し試み、また感じる、いわばあからさまで具体的な行為としてたちどまるのである。近年しげく使われる表現をとれば、たちどまることは、乳幼児および児童の世界認識と理解の「構造」に深く関わっていると言えよう。さらに子どもがたちどまる対象は、個々によつて一様でない。もしこれを道草やよそみと見なし、ただおとなした計画した内容・速度に従わせることをもつて教育活動としているのであれば大変だ。おとなの急務は、子どもの自發的たちどまりを許し助けることと合わせて、カリキュラムの中で何に子どもをたらどまらせるかを、検討し整理することではないかと考えるのである。

昼食時の忙しい買物の途中、実はほんの二、三分を割くことで、たちどまつた子どもに心ゆくまで時間を与えた母親の聰明な心情と、あの空間の雰囲気を、私は長く留めておくことだろう。

(東洋英和女学院短期大学)

“たちどまる”

伊豆山明子

たちどまる このテーマをいただいてから、じつと考へて

いるうちに、私の頭の中には、たちどまる、とは「とどまる」ことなのに、いろいろな思い出や、事柄が、どんど

ん流れ始めてきました。

“たちどまる”とは、新しい生活の出発点である、と定義づけたくなり、自分の生活や、現在の児童の姿が、つぎつぎと浮かんできました。

幼稚園の教師として、ただ夢中で過ごした約二十年間は、目の前の児童のことや、自分のクラスのことだけで終

始し、精一杯でした。

そしてその時は、それだけで満足していたようにも思ひます。

その当時、よく感心したり、不思議に感じたことのひと

つに、数クラスもある児童の中から、あの子は少し工合が悪いのではないの？とか、この子は様子がおかしいから熱を計ってみたら、など、注意をしてくださった主任の先

生の千里眼力や、超人的な觀察力でした。やがて、私も転任し主任となり、今までと異なる立場として、戸惑いながら続けてから早や七年も過ぎてしましました。

七年前の心境や、感激が、今よみ返ってきました。クラスを持っていた時は、一点しか見られなかつたことが、園全体の児童の姿が目に入り、いろいろと気付くことができるようになりました。そして、また、園児をこんなふうにしたい、あのようにしたら、と大きな夢が胸をうずかせたことです。

この時が、私の人生の道で一度おおきくたちどまつた時であると思います。この時に過去の二十年間をしみじみと振り返り、これから前途を見つめて、新しい出発をしたことになるのでしょうか。

四月に入園してくる園児たちは、さまざまなものであります。特に内気な子どもは、新しい社会に自分の身を置くだけでも精一杯で、夢中で数日間を過ごし、やつ

と周囲を見わたせる余裕ができるようになって始めて、敵中にある自分を感じたり、自分の思い通りにならないことに気付き、幼稚園の生活に恐れを感じたりする姿をよく見かけます。こんな時、周囲からの励ましや、自分で何とか打ち勝つことにより、次の生活に一步踏み出せることであり、これが、この子どもの社会生活の道で、たちどまつたことの重要な意味を持つことであると思います。

このように、たちどまる ということを生活の場面に照らし合せていくと、心理的、精神的に、また、行動の面に

も、数多くあることに気付いてきました。

鬼ごっこで夢中で逃げ回っている子どもが、鬼から逃げ切り、ほっとしてたちどまる、その時の満足そうな顔、そして、また新たな意欲をもって走り始めます。これが、いかげんに走っていたり、いやいや走っていたらこのたちどまる、という行動には、何の意味も価値もなくなるであります。

りましょう。

自分の力を出し切って活動する、また、何事にも真剣に考えるとか、夢中でおそびや、仕事に取組ることは、子どもでも、大人でも大切なことは、言うまでもないことです。

しかし、それらの活動は、常時続いていることは不可能なことであり、必ず、その活動がとどまることがあるわけです。

私のこれから的生活においても、無限に、たちどまる、と言ふことがあります。意義のある、価値のある、たちどまりであるために、努力や、精進をしてゆきたいと思います。それがまた、児童に働きかける貴重なエネルギーになることを信じて……。

“たちどまる” というこの何げない言葉が、たくさんの意味を持ち、味わいのあることを知る機会を与えて頂いたことを感謝し、これをもとに、明日からの子どもたちとの生活に、意欲を燃やし、新しい出発をしたいと思います。

(からすもり幼稚園)



よ よ う な 幼稚園

美 寿 满 依 田



よいしょと立ち上がり、一步二歩とおぼつかない足どりで歩きはじめた子どもを見て、胸がいっぱいになつたのはついこの間のことでしたのに、その子どもがことしは幼稚園へ通い出すことになりました。子どもの成長につれてもたらされる事柄に一喜一憂し、子どもに育てられ、教えられしている私ですが、ことさら、ひとりめの子どもの入園は、重大な出来事です。きょうはその入園前後の母と子がどのように過し、何を考え感じているのかということをお話してみようと思います。

夏も過ぎ秋風が立ちはじめると、来春から子どもを二年保育の幼稚園へ送ろうかしらと思っている母親は、その幼稚園のことが気になります。そして子どもにとって幼稚園は何故必要なのかと自問自答しながら、子どもにふさわしい幼稚園を求め歩きます。子どもも同年齢の近所の友だちの刺激をうけ、自分も幼稚園といふところへ行ってみたいと思うようになります。秋の終りには喜んで通えそうな幼稚園が決まります。（入園後数週間経たいま、毎日楽しみに通い、いきいきした顔で戻る子どもの様子を見るにつけ、息子にふさわしい幼稚園にめぐりあえたのだと思うのです）この段階で

は、来春からの生活をあれこれ想像し、今までのようなんびりした生活ぶりではいけないのだと思ひはじめます。一方まだ大丈夫、年が明けてから生活ぶりを改めればよいから、出来るだけ長く制約の少ないのんびりとした生活を享受しましようと考え考えます。

四年数か月という月日は、途中、もうひとりの子ども(妹)が加わり、又海外生活から日本の生活へという大移動こそありました。子どもの様子を見、こちらの都合と見あわせながらの昼間の母と子の生活は、比較的自由で時間に縛られるこのないものでした。ところが春からは、そろはいかないのです。これは家庭生活の大変革です。母親は心のうちにひとり春の日に思いを馳せ、緊張感を覚えます。一方子どもには努めて、緊張感や期待を抱かせないようにするのですが、言葉に伝わって行くのでしょうか、子ども自身も暖かくなつたら幼稚園に行けるのだと、漠然と幼稚園といふところを心に描き、胸をふくらませはじめます。「まあくんも春になつたら幼稚園に行くのね。僕も幼稚園に行くんだよ。あやちゃんは二歳だからまだだよ、四歳になつたら行けるんだよ。バスに乗つて行くんだよ」と。

年が改まるとき母親は、この三ヶ月の準備期間に実際どのよ

うに過ごしたらいいのかを考えはじめます。「朝早く起きたないといけないからもう寝ようね」と言葉がけ、早寝早起の習慣をつけることを心がけます。二月に入るとより具体的な時間を考へはじめます。すなわち、園には9時までに行かれるように一それには8時32分のバスに乗れるように一8時15分には余裕をもつて家を出られるように一そのためには何時にも子どもが目覚められればよいかー前夜何時までに床に入れるべきか、と。又どのようにいまの生活の流れを幼稚園へ通うための生活の流れに無理なく徐々に変化させていくべきだらうというようになります。

今までの子どもたちの生活の流れを一変させることなく新しい生活の考れをつくり出すために、あるがままの日頃の葉に伝わって行くのでしょうか、子ども自身も暖かくなつたら幼稚園に行けるのだと、漠然と幼稚園といふところを心に描き、胸をふくらませはじめます。「まあくんも春になつたら幼稚園に行くのね。僕も幼稚園に行くんだよ。あやちゃんは二歳だからまだだよ、四歳になつたら行けるんだよ。バスに乗つて行くんだよ」と。

年が改まるとき母親は、この三ヶ月の準備期間に実際どのよ

り出してみました。

2月6日(晴)

前夜 M(34歳3ヶ月) A(♀2歳7ヶ月) とも8時15

分にベットに入る。

6:30 M[目覚め]自分でガウンを着て食堂へ出てくる。ストレ

ブにあたってから食卓につき朝食をはじめる。

6:55 M「バイバーイ」と出勤のパパを見送る。

7:00 M朝食の残りを食べ終え、カップと皿をみせながら

みんな食べちゃったよ」という。

7:15 M「ママ、ウンチ」と訴えてトイレへ行く。

7:20 Mかごに用意されているTシャツ、ズボン、セーター

を自分で着替えM「Aちゃん起きなさいよ」と起こ

しに行くが、Aは眠っている。

7:40 M大好きなぬいぐるみの犬を抱いてラジオの天気予報

を聞く。M「ママ、きょう雨だって、お洗濯どうす

る? ドライヤーで乾かせばいいや。ストーブでも

いいや。ドライヤーとストーブで乾かせばすぐ乾

てしまうよ。おふとんも乾かせばいいや。おしつこ

ちびつてもストーブで乾かせばすぐフワフワになる

ね」母「えつ? M君したの?」M「ちがうよ。や
スヒロちゃん(ぬいぐるみの大の名)だよ」櫛をも
つてきてぬいぐるみの毛を梳く。

8:00 MぬいぐるみをつかってAを起こしに行く。

A[目覚め]食堂へ出てくる。Aトシャベルでほい♪の歌をうたつている。

8:10 母Aの(着替え)を済ませる

8:20 母Aの(朝食)の世話

M「M君遊んでくるよ」と子どもの部屋へ行く。戸外

を見ながら歌をうたつてている。四輪車に乗つて食堂

へくる。「Aちゃんにももつてきてあげたよ」とト

ラックを示す。

8:30 M母に四輪車とトラックをひもでつないでほしいとた

のむ。

A Mをみながら朝食を続ける。M「Aちゃんのつなげ

てあげるね」と話しかける。

A「(紅茶が)あついよ」。フウフウして

M「Aちゃん早く遊ばないかなー」と話しながらA

を待つ

8:40 M「ママ、ウシさんが欲しいね、ミルクがジュジュと

出るから。ウンチは僕がきれいにしてあげるから。

シャベルでウンチとつてトイレで流せばいいよ。チ
イはバケツに入れトイレにジャットと流せばいいで
しょ。ミルク飲めるもオ」母「そうね」と合づちをう

つ。M「ヤギのミルクも飲みたいね、ヤギを飼えば
いいや、馬のミルクも飲みたいなあ」

A「おナス好きかしら（ナスは、M、Aの嫌いなもの
となっている）チヨリ一も好きかしら、チヨコレー
トも好きかしら」

M「子どもの部屋へ行こうとして「ねえママ見てて、ト
ラックがまがると（ひもでつないだ）うしろの車も
ひとりでまがるよねえ」母「そうね、見えるわよ」
M「こっちにきて見てよ」母 Mの方へ見に行こう
とすると、A「Aちゃんも抱っこ」母 Aを抱いて
見に行く。母 Mに「Aちゃんも乗せて、乗ってい
いでしょ」と頼む。

M「いいよ」A「いやだ、Aちゃんおなか痛いもん」

母「じゃ、ベットで寝なさい」A「いやだもん」
母ベッドのそばで「お人形さんまだ寝てたわよ」とA
に示す。Aさっと人形を取る。Mもやってきてベビ

一人形を探す。おもちゃ箱からぬいぐるみを取り出
し、ベットの上段にぬいぐるみを載せ【M、A、二人
で遊び出す】母は食堂のあと片付けに行く。

9:05 M 食堂にとんで来て「ママー、フィッシングするの、

大きなクジラ釣るの」「わあいクジラだ」と言いな
がらベッドに戻る。ベッドから「ママ、大きなクジ
ラとサメ釣ったよ。ほら見て。クジラは58センチで
サメは20センチだよ。大きいな重いな」と呼ぶ。

Mベッドからおり「クジラ、クジラ逃がしちゃお」と
いいながら本棚のところへ行く。魚図鑑を探し見せ
に来る。「ママ 出てるよ、これがサメでしょ」

9:15 A「ママ、チイ」と訴える。【トイレ】へ連れて行く。

すぐその後でM「チイ」といい、自分で用をたす。
M再び魚図鑑に見いる。ヒラメを見つける。

母Mに「(ヒラメは) こちらが白くて、こちらが黒い
でしょ」と注意を促すが、興味を示さない。Aはそ
れをきき、「Aちゃんの本にも出てた」とさっそく本
棚からA所有の本を持ってくる。Aも自分の本に見
いる。

以上は、代表的な一日ですが、他の五日間もこのように、おもむくままの行動が連なっていきます。六日間の記録をとおしてみて、いますと実に多くのことがわかつてくるようです。

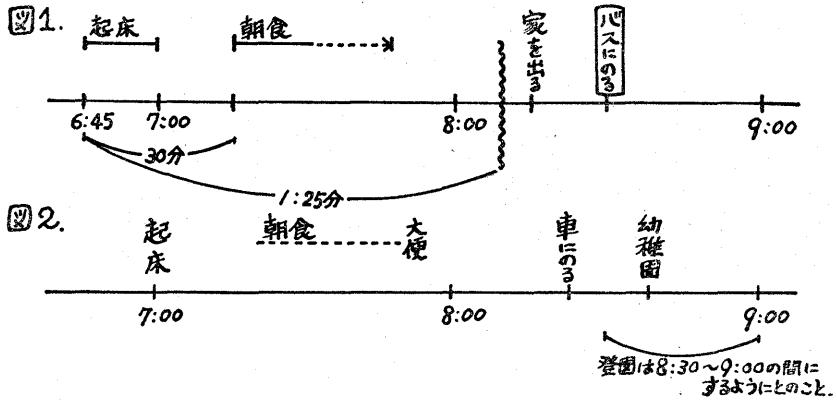
子どもらと生活しながら家事を進めながらの記録に、苦痛を感じさせましたが、いろいろなことを考えさせてくれる大切な資料となりました。ここでわかったことを目安にして、新しい生活の流れを考えることができるのではないかと思われます。

- (1) Mは夜平均して10時間50分眠ると朝快い目覚めができ、Aはそれより50分以上多く眠る必要があります。2歳半のAにはまだ昼寝が必要なのかもしれません、兄妹で遊んでいるとその機会を逸してしまうのです。夜も同様で、ひと足早く寝せるということも出来ません。
- (2) 朝食に要する時間は食欲のあるときは15分程度ですが、さもないと30分近く必要。
- (3) 遊びは摸索的な時期を30分から1時間経て、定着したものに入って行くようです。定着した遊びは起床後1時間25分以後、1時間45分から2時間半にも及び展開してゆきます。
- (4) Aは目覚めにつまずくと一日の生活の軌道にうまくのれないとあります。

これらのこと念頭におき、朝の準備をスムーズに、しかもあとに続く一日の活動（遊び）が抵抗なく発展していくようなペースを具体的に考えてみました。

幼稚園へ子どもを送り出す側の親は、子どもの体調に気づかることはもちろんのこと、その精神面においても快く登園できるような配慮をしてやりたいものと思います。起床後の余裕のある時間から、幼稚園での子どもの精神をつき込んだ充実した活動のエネルギーが生まれるものと思います。Mの場合、起床後平均して1時間25分後に摸索的な遊びを経て、定着した内面を充たすような遊びが展開すると前にのべました。が、この1時間25分という目安と、本数の少ない中から選んだバスの時刻8時32分を基準に次頁図一のタイムテーブルを考えてみました。—その場のあらゆる条件に左右され、生活の流れは日により変動のあるものですが平均的なパターンを見つけることは、あながち無意味なこととも思われません。四月までの準備期間には、このタイムテーブルの目安を中心の隅にとどめ、比較的のんびりと過せました。

いよいよ幼稚園通いの生活が始まります。一ヶ月前を得



た目安をよりどころとして、余裕をもって準備していたこともあり、順調に新しい生活の流れにのり変えてゆくことができたと思われます。さらに受け入れ側の幼稚園の配慮が、一週、二週、三週と週単位で徐々に無理なく、その生活の流れを変えさせたと思われます。たとえば、第一週目約30名のクラスの子どもは二班にわけられ、8時半から10時と10時半から12時と二部保育されたのです。初めて集団生活にとび込む子どもらにとって、

た目安をよりどころとして、余裕をもって準備していたことが、幸いであつたと思われます。7週目に入配属されたのが、幸いであつたと思われます。7週目に入れた今日、水、土曜日を除く毎日お弁当をもつて出かけ、年長組の子どもたちと同じ時間を幼稚園で過ごすようになります。Mにとって幼稚園は楽しいところであるように見うけられます。

この段階的な方法は、効果があつたのではないかしらと想像しています。とくに遠くから通うMの場合、後半グループに配属されたのが、幸いであつたと思われます。7週目に入れた今日、水、土曜日を除く毎日お弁当をもつて出かけ、年長組の子どもたちと同じ時間を幼稚園で過ごすようになります。Mにとって幼稚園は楽しいところであるように見うけられます。

入園後、4、5週目にとつた8日間の朝の記録をもとに、再び平均的なパターンを書いてみましょう。上記図2に示すものです。

7週目に入ったいま私が心がけていますことは、

(1) 7時には目覚めを促すこと

(2) 8時には「さあ、幼稚園よ」と子どもの心を幼稚園へ向ける言葉かけすること

(3) 8時までは自主的な行動を待つて子どものやりたいようになさせること

(4) いままで不可能だった、Aと二人だけの時間を大切に過ごすこと

最後に、こんな日が毎日続いたらいいな、という思いを込

め、7週目のある日の子どもの様子を見ていただこうと思います。

5月26日(曇)

前夜、MとAは音楽を聴きながら床に入る。

6:30 Mもそもそも起き出し「M君おしつこ」

母「おりこうさん、早くいかなくちゃ」

6:40 M自分でタンスからTシャツ、シャツ、半ズボンを取り出し着替えるM「きょうは半ズボンがいいや」母

「まあ、ひとりでできるのね、いい子ね、シャツ着てるの?」とシャツの下に、下着を着ているのを確かめる。

M半ズボンをはきながら食堂へ出でる。パパのおみやげを食卓にみつけ、寝室へ持つていき、パパに話しかける。「ゆ、ず、も、ち」と箱を読んでから、

「じりもちだ」と思いつく。食堂へきて「ママしりもちだよ」と発見したときのような笑みをうかべて報告。Aのベットへ行き「Aちゃん、パパのおみやげよ、しりもちだよ」とやさしく声をかけている。

A(目覚める)M、A、連れだつて食堂へ。A快い顔つ

7:00 M A 食卓につく

Mバターフィッシュパンに自分でハチミツをつける。パパにたれるよと注意される。

A「Aちゃんはピーナッツバターがいい」冷蔵庫から出してもらうと自分でスプーンをとりパンにつける。

7:20 父が身支度をするために食卓を離れる。子どもたちも「もういいの」といつて椅子からおりる。レタスのみ残す。

7:40 M A、「ペペ、バイバーイ」と見送る。

M幼稚園バックをもつてきて食堂で出来上がりたお弁当を入れる。カッパをナップキンで包んで入れる。母はし箱と歯ブランシを渡してやる。

M「M君、おなまえとリボンをつけなくちゃ」といひ、名ふだと方面別のリボンを探して、これも自分でつけている。

7:50 M「ウンチにいかなくちゃ」と言いトイレへ

母Aに着替をする。

M「ママ出たよ」と呼げる。母、トイレへ行き、Mの

き。母「Aちゃんも起きてたのね。おはよう」

世話。歯に食物がついているのに気づき指でとろうとする。「こんなのがついているよ」と見せる。(歯みがきに気ついたらしい)

M(いつも歯みがきは夜だけなのに)今朝は自主的に歯をみがく、洗面所に水をため、タオルを浸して顔を洗う。

M「きょうは顔も洗ったのね」と乾いたタオルで顔をぬぐう。Aの着替えを済ます。

8:00 M帽子を所定の場所からとつて食堂へ。

母Aにくつ下をわたし「はきなさい」と促す。

M出されていたくつ下を自分ではく。

8:15 M玄関にて靴を出してはく A(前日洗った靴を見て)

「わあ新しいのだ」といはき、二人そろって家を出る。車に乗り込む。(意を決して4週目から私の運転による車で送迎することにしました)

8:25 出発

幼稚園近くの車の中で、M「きょうは、僕一番かな、三番かな」母「そうね、きょうは早いからまだお友だち少ししか来ていなかもね」幼稚園の百メートル程手前、通園児が見えたので

「じゃ今日はこの辺で降りて、歩いて行きなさい。氣をつけてね」といつて降ろす。

M(落着いた顔つきをして)「じゃいいてくるからね、バイバイ」歩き出す。Mは途中からかけ出し園に消える。

母車をとめ、Mが園に入るのを見とどける。「じゃAちゃんおうちに帰りましょうね」Aと一人だけの数時間が始まる。



「私の保育のはじまり」

——あたらしく入つて來た子どもたちをめぐつて——

石川 章子

保育のはじまり。まさに私の場合は保育のスタートである。

幼稚園をかわり、新しい環境での四月。しかも四歳児を担任。入園に期待を持ちつつも大きな不安や心細さを隠しきれない子どもたちと同じように、私も実際の保育が始まるまで、意欲と不安の入り混つた何とも複雑な心境の日々だった。しかしそれだけに子どもとの出会いの第一歩である入園式以来、今までにないすがすがしさというか新鮮な気分を感じている自分に気がついた。

「さと子ちゃん早く来たのね。一番よ」「すぐお友だちも来るからね」「あうとくるの?」「そうよ、ここに全部お友だちがすわるのよ」私と同じように「どんな子が来るのかな」と振り返つてはどんどん登園して来る友だちを見ている子どもたち。「よーし一緒に頑張らなくては」とファイトが湧いて

きた。

◇入園当初のあそび

広い保育室に入つて、ままごとや積み木などの遊具に目を向ける子どもも、知らない友だちに目を向ける子どもも、教師に目を向ける子どもがあると思う。遊具に目を向けた子どもたちは、何も言わなくても遊びはじめる。だれが一緒にやるうともおかまいなしに、自分は自分でやり始める。友だちや教師に目を向けている子どもたちは何となく、オドオドしている。特に「何をするんだろう」「何が始まるのだろう」と教師ばかり見ている子どもは、手をつなぎに来たり、声を出したりすることもなくジッとしている。そして時には泣いて寂しさを訴える。友だちや、そのあそびに目を向けている

子どもたちは、他の子どもたちが案外平気そうに遊んでいるのを見て、だんだんと幼稚園という場に慣れていくのだと思う。だから、やさしいことばかりや氣を紛らわすような話を必要だとと思うが、むやみに抱いたり、なだめたりご機嫌をとつたりしなくとも、乱暴なようでも、こういう子どもたちに幼稚園というものを見せてしまうことが大事ではないかと思う。しかしそれが“つまらない幼稚園”ではなく“おもしろい、楽しい幼稚園”であるようにしていかなくてはならない。

い。

(1) ままごと

「ます」ちそうせめである。「先生」はん」「はいじゅース」「はいバナナ」と次から次へと持つて来てくれる。「」はんたべたからねよ」ととゴザを敷いて寝る子どもがいた。「先生もおなかいっぱいになつたから寝ようかな」と何の気なしに言い、実際に横になると、ままごとをしていた子どもたちは喜び、それを見ていた子ども、へやの隅から教師の行動を見張っていた子どもたちはびっくりしたようだった。そして、ありつけのゴザを敷きつめ、みんな寝てしまつたのである。これには私の方がびっくりしてしまつた。おかあさんは寝てくれないが、「先生は寝ちゃつた」のである。「ボクも

寝てみよう」という気持になつたのかもしれない。良いことにしる悪いことにしる“先生とは大変なものだ”とあらためて思った。

ままごとでも、砂場での遊びでも、「先生、おとし穴に

入つて」「先生トンネルやつて」と「先生」「先生」の連発。とてもモテる時期である。しかし「モテるな」と喜んではいられない。「先生」と来た子どもに対して、「」ちそうさま。

おいしかったわ」とか「すい分高い山ね」など一方通行で終らせるのではなく、「あらお砂糖入つてのかしら?」とか、

「今度は○○ちゃん穴に入つてみてよ」と返してやること。

またその子どもだけに返すのではなく、他の子どもにも渡すことで、によって教師対子どもばかりではなく、子ども対子ども、となつていくようにしていかなくてはならないと思う。

(2) 絵をかく

自分専用のはさみ、クレヨン、ひき出しを持てたうれしさがはじめはあると思う。クレヨンは使つた後、きちんと並べて大事そうにしまいに行く。このうれしさと、何かに夢中になつていることができる安心感からか、何枚も何枚も絵をかく子どもがいる。「絵、かいていい」「紙ちょうどいい」と言う子どものほかに、「先生、クレヨンで遊んでもいい?」とい

う子どもがいた。「こうやって遊ぶの」と聞きたいのをがまんして「いいわよ」と言うと、クレヨンを出してきて「先生紙は」と言う。何のことはない。絵をかくのである。しかし大人にとっては絵をかくことが目的であるかも知れないが、子どもにとつてはまさにこの子どもが言うように「クレヨンで遊ぶ」ことが目的なのかも知れないと思つた。

(3)あたりまえのこと

庭に出てかけ回つた。バタバタと子どもたちが転ぶ。よくまわりを見ないから、足がまだ幼ないからだけではないと思う。もう一ついくら列になつて歩かせてみようとしても、どうしてもはみ出で来てしまう。どちらも「はじめだから仕方がないこと」ではあるが、なぜ仕方ないのかを考えてみると、原因是教師にあるのではないかと思う。「先生何を言うのかな」「どこへ行くかな」という時期であるから、子どもたちはいつも教師を見ているのである。「ころばないようにな」とか「お友だちのうしるから来るのよ」といくら言つても、教師の顔を見ている(つまり上を向いている)ので、まわりに目が行かず、転ぶし、前の友だちを無視して先生について歩いて来てしまうのではないかと思う。私は入園当初はあたりまえのことでも、ちゃんと口に出して言つてやらな

(4)アイスクリームづくり

紙しばいを見ている時、「先生のどかわいた」と立ち上つた子どもがいた。ここで「水飲んできていいわよ」と言うと、みんな行きそな気がしたので、「じゃあ先生がアイスクリーム食べさせてあげるわ」と手をらせた。「ゆうちやんのミキサー車(じどものとも)」の話から、「みんなの手でコップをつくって」「ひん」と片手を器にさせる。「そ」につめた一氷を入れるの「次には牛乳を入れてかきませて……」と手まねをする。子どもたちは真剣な顔をしてまねをする。「次にたまごを入れてかきませて……」「はちみつを入れ

くてはならないと思っている。たとえば「手をつないで行こうね」といくの言ひでて離してしまう子どもがいる。あたりまえであるが、「手をはなしちゃだめよ」と言いつと、「もうはなしてもいいわよ」と言つまでつないのである。また、「お友だちのうしろから来るのよ」といくら言つても列は乱れるが、前にいる友だちの肩をたたかせ、「前人の背中を見て歩くのよ」とくり返していくうちに、列になつて歩けるようになつてきた。四歳児といると、手をつなぐ=手をはなさない。うしろ=前人の背中、というようあたりまえだと思つていてことばの意味を考えさせられてしまふ。

てまたかきませで……」「やようとなめてひらん」と指を漫してなめてみる。子どもたちも一緒に指をなめてみる。「甘い?」「うん」「もう少し入れようが」「うん」とくり返す。この頃になるとだんだんわかつてきたらしくニコニコしてくれる。「次はえーとイチゴを入れようかな」「バナナがいい」「みかんがいい」など答えてくれる。「じやあバナナを入れてかきませで……」そしてソフトクリームのように山盛りにして食べる。これは五歳児にやってみても通用しない。不思議と四歳児入園当初はみんな喜んでまねをする。「ねー先生またアイスクリームやつ」と遊んだ後などよく言う。“出して引つこめて”という手あそびよりもおもしろ味があると思う。

◇またあしたも

入園式の時、ハンカチをかみしめて泣いていた子どもが、ごみ箱にボールを投げ入れるあそびを発見し何度もくり返すのを見たり、積み木を高く積み上げては倒し歎声をあげていた子どもが、「先生、テレビいっぱいできたよ」「どーれ」「ここがニュースのテレビ、ここが天気予報のテレビ、ここがマンガのテレビ、ここが野球のテレビ……」と一つひとつ

顔をのぞかせて説明する姿を見て、「変っていいな、動きはじめたな」と私の方もわくわくしていく。そして、「先生さうなら、またあしたも来るからね」「あしたこの汽車に乗つてね」という子どもたちのことば。「先生あした電車が動かなかつたらお休みするかもしれないわ」と言うと「じやあボクたちどうすれば良いの」と心配そうに言う子どもの顔。「今日はたけしにアイスクリームの作り方を教わりました。大人しく、幼稚園になじめるかと思つていた子が作ってくれとせがむので、言う通りに作りました。何とも奇妙な飲み物ができ上りました」という母親からの知らせ。これに“またあしたも頑張ろう”とファイトを燃やす私。

環境が新しく子どもが新しい。それだけではなく（それだからこそ?）何か自分が今までとはちがつたような気がする。

まだスタートしたばかり。ゴールまで続くだろうか。

(文京区立汐見ヶ谷幼稚園)

一学期を迎える新入園児について思う

西本美節

子どもにとって幼稚園とはどんなところ

生まれて初めて初めての集団生活を経験してきた園児にとって、夏休みほど、自己を取りもどせる機会はないにちがいありません。おとなでさえ、ある日突然、名まえも知らない大勢の人の中に投げ込まれたら、どんなに戸惑うかもしれません。まして、緊密な母子関係の中だけで過ごしてきた幼児にとって、幼稚園は楽しいどころか、恐ろしい所であり、苦しい所であつて、我慢するのが精一杯でした。それなのに、"ちゃんとしないさい" "きょうは何を習ったの" "何をしたの" "お友だちいじめてはだめ" "いじめられたの。悪い子がいるのね" "先生の言うことを聞かない子は、頭が悪くなつて、お勉強ができなくなつて、いい学校にはいられないよ" "しっかり先生のおつしやることを聞いてくるんですよ" "そんなかっこうしたら、皆に笑われます" "幼稚園へ行つてているのに、どうしてそんなことく

らいでできないの" "べすべすべしないでサッサとしなさい" "○○ちゃんはよくでかけるのに、あんたはなによ、だめね" "そんなにちょこちょこしないで、少しはじつと落ち着いてみなさい" "赤ちゃんが寝ているんだから、幼稚園へ行つているお兄さんは少し静かにでかけるでしよう" "お姉さんが宿題やつているんだから、ひとりで静かに遊びなさい" "いつまでも暗くなるまで帰つてこないんだから、困つた子ね" "テレビばかり見ないで、少しほは○○ちゃんとお外で遊んだら。家の中ばかりいると、かたづかなくて。もういいかげん幼稚園が始まつてくれるといいのに" "そんなに冷たい物ばかり食べたらいけません。先生とお約束したでしよう。やめなさい" "どうして食べないの。せつかくおばあちゃんが買ってきてくださつたのに、いやらしい子ね" ……こんなことばを始終聞いていると、「ああ、わたし(ほく)は本当にこのお母さんの子どもなかしら」と

悩んでしまいます。「ぼくは仮面ライダーになつて『エイヤー』

とやつつけたい」「わたしは秘密のアッ子ちゃんになつて、ど

ではありませんか。

不思議なことが一杯ある夏休み

初めての夏休みは、児童にとって、家庭外の物事に興味や関心が強く持たれるときでもあります。毎年めぐつてくるお盆や夏祭りの行事も、"どうして"、"なぜなの"と質問の連発です。だんまり屋の児童は、その子なりに「なぜ雷はなるのだろう

うの忘れたわ。あしたでいいでしょ」と平気で言い、あしたの約束が果たされたのは四、五日もたつてからです。四年余りも付き合っている相手だし、好きな人だから我慢するけれど、児童にとって母親は付き合いづらい人です。夏休みの初めごろは、こんなに気楽な生活があつたのかと、しみじみ感じましたが、日がたつにつれて幼稚園の先生が恋しくなり、Yちゃんなどろんこ遊びをしたことや、今ごろし子ちゃんは何して遊んでいるかしら……などと思い出すころ、ようやく二学期が始まります。母親を離れてひとり立ちする心も、他人を思いやる気持ちが一学期の間に育つたのです。もしわたしたちがすることとなすことに、いちいち他人から干渉されたとしたら、きっとノイローゼになつてしまふでしょう。児童はなんとやさしくて思いやりのある、おおらかな心を持つている、すばらしい人間

「タ立ちの雨は、大きな粒がボタボタと落ちてくる。大急ぎで走つて帰つたのに追つかけてくる」などと考え、「ここに咲いていたお花はどこへ行つてしまつたんだろう」「アリンコってたくさんいるもんだなあ」と自然を友として語りかけ、アリの穴を見つけては「おむすびころりん」のお話を、先生と共に思ひ浮かべながら、想像の世界を楽しんでいます。海へ出たわんばく坊主は、貝がらや小石を波がしらに乗せて遠く飛ばすことを覚えるでしょう。大波にころがされても、泣き顔を見せず"こんなん平気、へいちゃら"と強がりを言うでしょう。力いづばいの自然との戦いは、すがすがしい気分を残し、やる気を起させます。

こわがり屋のT君も、ことしは親類にひとりで泊まることができ、ちょつとした冒險を体験しましたが、やればうまくやれ

るという自信が生まれ、二学期のさいさきよいスタートを切りました。甘ったれのHちゃんは、赤ちゃんの膚にパウダーをはたいたり、赤ちゃんと二人でおるす番をしたりして、すっかりお姉さんらしくなり、「赤ちゃんはお話をできないから、かわいそう」と、自分から進んでいろんなお手伝いをするようになりました。人の役にたつことは、お母さんになったみたいで、うれしくてしようがありません。このことを早く幼稚園の先生やお友だちに話したいと思っています。

遊園地へ行かなくても、海や山へ行かなくても、幼児は幼児なりの心からだで、生活を見つめ考え方、豊かな経験をするものです。「じつとしているのに、なんで暑いんかな」と考え、なんでも意欲的に自分の中に取り入れようとします。昼下がりの道を歩き駅にたどり着いたとき、スーっと涼しい風がほほをなでました。「お母さん、だれがクーラー入れたの?」「クーラーと違うのよ」クーラーでなくともこんなに涼しいのは、なぜだろう?と不思議に思うのです。きのうは筆先のように見えたものが、けさ起きて見たら、開いて大きな赤い花がラッパみたいに咲いていました。前に、先生といっしょに、ちっぽけなまつ黒い小石みたいな物を、植木ばちに入れました。そのとき先生は「朝顔の種です」と言ってたから、これはきっと朝顔と

いう花だろう。朝顔って緑色をした葉っぱばかりだと思っていたのに、ヒラヒラが赤くて白い穴が見えた。隣の家の青いのもよく似ているなあ。お母さんの声がします。「ねえ、お父さん、お隣の朝顔、紫色よ。とてもりっぱに咲いてるわ」「あれも朝顔だった」「ねえお母さん、うちの朝顔咲いたよ。見て、見て」「けれども、うちのチンチクリンな朝顔は、お母さんにどうては魅力がないらしい」「ああ、そう」そつない返事でした。「いいよ、いいよ、お隣のよりずっと大きく見えるもん」「それ、絵にかくといいわ」「もう、うんざりだ」「お母さん、幼稚園の先生はね、『お花は、大切にかわいがつて育てるのですよ』って言つてたよ。だから、かかなくてもいいの」それ以来、T君は「これは、自分がしつかり育ててやらなければ……」と、責任を感じ、生き物を育てること、命を大切にすることを覚えました。「来年こそは、お隣のおじいちゃんに負けないよう、しっかり大きく育てよう。それには、お隣のおじいちゃんと仲よくなつて教えてもらわなければ……」すなおに人の話を聞いて習うという協調の態度が芽ばえてきました。しかも相手は両親でなく、隣の家人といふように人間関係の広さがりさえも持つことができるようになり、社会人とのつながり、親しみの情もこうして育つていきます。

友だちとの遊びがとっても楽しい新学期

日本の夏はとりわけ蒸し暑く、過ごしにくい季節です。けれども、家庭中心の日常生活の中で、良いことも悪いこともあります。なく取り入れた幼児は、背たけの伸びや、日焼けした黒さだけでなく、心からだも成長し、さまざまな経験をして、二学期を迎えます。長い休みの間に調子が狂つたままの幼児は、幼稚園の集団生活から逃避するようになり、入園当初の状態にとどめたりしたり、登園をいやがったりすることもあります。このような園児には、二学期が始まる一週間か十日ぐらい前に、絵はがきを送ったり、電話を掛けたりなどして、登園に対する心構えを持たせるように、教師が積極的に働きかける必要もあります。身近な事柄について子どもと個人的に話し合ったり、ときには友だちと誘い合わせて迎えに行くのもよいでしょう。

夏休み中ひとりひとり違った経験をしてきたのですから、またそれぞれの幼児の話をすなおに受け入れてやり、友だち仲間の中で話し合うようにしむけることが大切です。集団生活のルールをよくのみこんでいるように見える幼児の中に、目だたないおとなしい子どもがいます。こういう子は、ふだんつい見落とされやすいタイプなので、夏休み中のいろんな経験を通して、積極的に発言したり、行動ができるようにしむける配慮を

忘れてはなりません。

園生活が自分のものになり、失敗しながらもまつこうから物事に取り組む子どもの顔つきはいきいきとしています。積極的な幼児は、少々度はずれの悪ふざけを始める時期です。教師の役割は、豊かな経験をもち活動が活発になる子どもたちの交通整理と、秩序を保つための方向づけをすることでしょう。さしあたり空港のコントロールタワーの役といったところでどううか。

このころから、幼児はようやく幼稚園生活が楽しいものとなり、自分の幼稚園という意識が次第に喜びに変わり、自分たちで考え、計画をし、行動できる充実した生活を送るようになります。秋の運動会や遠足などの行事に対しても、自分なりの期待や希望を持つて積極的に参加するようになり、当番やリーダーになって、遊びや生活の役割を果たそうという気持ちもわいてきます。まだ、やり方は未熟ですし不器用ですが、失敗を恐れではありません。命にかかることではないかぎり、子どもなりの考え方を尊重し、友だちの知恵や力も借りて、みんなで励まし合い、どうすればよいかを考え合ってやらせてみることです。

(神戸常盤短期大学)

「私にとつての保育のはじまり」

子どもたちの動きの中に

一時代の音楽を期待する

松沢孝博

演奏会へ足を運ぶ。演奏されるのは、十七世紀前後の音楽である。聴衆が席につき、舞台には演奏者達が入り、最後に指揮者が入場する。いよいよ指揮者の棒を待つのみ。指揮者は心を鎮めるかのようにしばらくうつむいている。指揮者が右手を動かした瞬間どんな音が出てくるか、この演奏者たちによつてどんな音楽が奏でられるのか、期待する緊張の一瞬である。それは、各演奏者達によつて音が違ひ、リズムが違ひ、音楽が違うということへの興味のみならず、音楽がみずみずしく生れだす感動への期待でもある。

指揮棒が振られ音楽が鳴りはじめる。第一バイオリン二つが主旋律を弾いているが他の楽器は休んでいた。実際に手を

動かしていないだけでは、自分の出番まで拍を数えているわけだから、ちょっと休憩というわけにはいかない。何小節か過ぎると第二バイオリンが先の第一バイオリンと同じ旋律を弾きはじめる。第一ガードである。同じ旋律が遅れて入っても違和感はなく調和の響きを感じる。すると次々に、あるいは同時にビオラ、オーボエ、フルート、チエロ、バス、チエンバロ、そして八声部の合唱が加わってくる。耳を澄ますと、もちろん主旋律はあるが、いろいろの楽器がそれぞれ独自の旋律を演奏している。当時は、演奏記号は余り多く使われない

で、演奏者に任されていた部分が多かつたらしい。それは作曲者の意図を忠実に表現しなければならないというのではなく

く、演奏者がこう演奏したいという自己の必然性に支えられてされるような演奏の自由があつたようだ。また単に自由といふばかりでなく、他のパートの音も聞き合ひながら和声的にも美しい響きを出していく。音楽は水平的に流れるところもあれば、垂直的に力強くあるところもある。そしてどれ一つのパートも欠かすわけにはいかない。つまり高音が優勢で低音が劣勢で、単に主旋律に合わせて和音を作っていくというわけではなく、自らの特徴を主張しながら音楽的個性を奏でる。そしてその個性や特徴を維持しながら全体の作用の中で、一つのまとまりある音楽が生れてきていく。

さて、四月になると新しい子どもたちが入園してくる。私にとって、多くの場合初めて集団の中で過す経験をする子どもたちがどのように動きはじめるか、またそれがどのように変化していくのか大変興味がある。それはあたかも、静まりかえったホールで指揮者が棒を振り上げるのを待つ聴衆と同じ気持である。

いよいよ子どもたちが部屋に入つてくる。ヒデちゃんはお母さんにびつたりくついて一ミリといえども離れようとしない。これから過す部屋や他の子どもたちが全く視界に入ら

ないくらい、お母さんの腹の中にうずくまっている。一人で動き始めるのにどの位かかるであろうか。しかしまわりのようすは感じとつているみたいなので、全くの動きの休みではない。もしかすると、四分休符か、あるいはそれが數十小節続くかもしれない。シゲちゃんは、うつて變つて部屋に入るなり一目散に園庭に飛び出して走りまわっている。とにかく走りまわっている。マコちゃんは、お母さんのスカートのすそをしつかり握つて部屋に入つて来た。先生がオモチャを持つて迎えるとすぐに興味を示し、いつのまにかそそから手が離れ、両手でオモチャで遊んでいる。タカちゃんはすぐトランポリンにのる。二、三度うまくいかないがすぐ上手に跳べるようになり、跳び続けている。先生が手を差し出しても見向きもしない。オモチャを出しても知らん顔、視線も合わない。しかし、何か生きがいでも見つけたかのように生き生きと跳び続けている。ミツちゃんは本だなを見つけ先生の手をとり椅子にすわらせる。そして本を読めとせがんでいる。ティーちゃんは部屋を一まわりした後、トイレに行く。先生がようすを見に行くが、どうも生理的要求現象ではないらしい。トイレのドアに興味が向いている。それを開けたり閉めたりしているうちに中に入り、ニコニコしている。ユウちゃん

んは水道の所へ行つて水遊び。飛び出す水の感触が気持ちいいらしい。キヤツキヤツと喜んでいる。たまたま園庭を駆け回っていたシゲちゃんが部屋に駆け戻り、すぐ一緒に水遊びをはじめる。

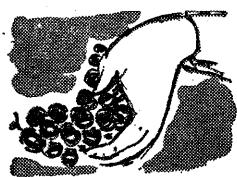
全く大人の手を借りずに自ら動き出し、楽しみを見いだしている子ども、大人の手を必要としながら動き出す子ども、すべて大人の手の中にある子ども、様々である。一人一人ようの違う子どもたちには、自分なりにそれぞれ動いている。

お母さんとペッタリのヒデちゃんも、心は動いている。動き出す準備をしている。一人一人の子どもの動きはその子どもの自らの主体によって独自に動いている。そうでありながら不調和ではなく、むしろ一つのまとまりとしてクラスの特徴を示していくのである。そしてそれは、子ども自ら興味をもって手をつけたり、動き出したりすることから自分自身の活動が生まれ、そこからその子どもの発達を期待することが出来るという考え方を支えてくれる。

子どもたちの動きに華麗さや流麗さは見られない。しかしこのようすは私に先の音楽、つまり、パリフオニックな音楽がそれを基としながらも、ホモフォニックな音楽に移りゆく時

代の音楽を、そしてその演奏の始まりを感じさせる。素晴らしい演奏者である子どもたちが、自らを出し切つて演奏出来る（動ける）かどうか、私がそれに十分応えることが出来るかどうかという不安と、今年は子どもたちによってどんな素晴らしい音楽が奏でられるのかという期待を抱く入園時である。

（愛育研究所家庭指導グループ）



「私の保育のはじまり」

——あたらしく入った子どもをめぐつて——

小野 真理子



四月に新学期が始まって、十日の入園式に出席する子どもたちの中に、私どもの一人息子Hの姿も見られた。

「入園」という保育のはじまりは、Hにとっても母である私にとってもいろいろな意味で「はじまり」であった。

ここで、過去の事になつて恐縮であるが、私ども両親が一年前に、Hをほかの幼稚園に入園させた時のことと書かせて頂きたい。私が仕事を持つていたのでそれまでHは、一日のうちの大半を祖父母の家で過ごし、のんびりと育てられた。祖母はHにとって最愛の人であった。私ども両親は、三歳のHにとってもうひとつ楽しい場所が増えるとよいと思い、Hを祖父母の家の近くにある幼稚園に入園させた。しかし、H

は初めからなじまず、半年もたつと「幼稚園へは行かない、おばあちゃんの家に行く」と言つて園の門をくぐろうとしたくなってしまった。その原因は、「幼稚園」でも「おばあちゃん子」でもなかつた。それは、朝は寝ているところをたたき起こされ、朝食もそこそこに自転車の荷台にのせられ、ランシングの電車に三十分間揺られて駅へ着く。駅からは祖母に連れられて幼稚園へ、幼稚園で三時間余り遊ぶと祖母の家へ、そして夕方のランシング時には再度朝のコースに戻つてくるような、殺人的な生活のリズムに因るものであることはあきらかであった。こうした子どもの一日のリズムが無視された生活の中には、子どもが新しい場を自分の目で確かめたり

楽しんだりする余裕が用意されていなかつたのだ。そこでHはその幼稚園を中退し、また元どおり祖母との楽しい毎日に戻つた。子どもにとつてあらたな場であらたな人や物との出会いを体験するには、その前提として変化しにくい日常的な場、予測しやすい安心な場が、子どもに育つていることが大切である。

たまたま私は今年の三月で、往復に四時間以上かかる職場をやめた。そこで私は、子どもがその生活のリズムを尊重されつゝ幼稚園に通える場を作りたいと思った。その第一歩として、母としての私が家庭にいて安心な場作りをすることにした。そして子どもには、家から子どもの足で歩いて三十分ほどの所にある近所の子どもたちが多く通つている幼稚園へあらたに通うことを勧めた。

こうしてHにとっても、私にとっても新しい保育活動が今年の四月に始まつた。

四月に入つて間もない二日に、新しく入園する子どもたちのための「一日入園」という試みが幼稚園で行われた。その前夜私がま新しい制服のブラウスにアイロンをかけていたと、Hは「アッ」と思い出したようにうれしそうな顔をして、何かゴソゴソと捜し始めた。

H「僕のカバンとかねんどの入つてる袋どこ？」新しい道具を捜しているらしい。

母「H君の机の上に袋あるでしょ。その中よ」

H「あつた、あつた」袋ごと母のそばに持つてきてひとつずつ取り出して見ている。「名前書いた？　あーここに書いたの。クレヨンにも書いたの？　一本一本書いたの？　どうして？」などと一人言を言う。

新しい帽子や新しい画用紙が、翌日から始まる新しい生活を楽しみなものにさせているようであつた。

一日入園は、空がまぶしいように青い、気持ちのいい朝が始まつた。Hは近所のT子ちゃん、K子ちゃん、Y君、K君、そのお母さんたちがそろつて出掛けることがよほどめずらしかったのように、この集団からチヨット離れながら、ジロ君と一人一人を見まわしている。日頃よく一緒に遊んでいた他の四人の子どもたちは、「K子ちゃん手をつなごう」「Yちゃん」と手をつなぎなさいなどとお互に世話を焼きながら、背すじをシャンと伸ばして歩いていく。いつもはふさけあって道路の上をころがっていく子どもたちが、ボールのようにはづみながら、誇り高く歩いていく。Hもニヤニヤしながら、次第に誇り高いメンバーの一員になつていつた。

ところが幼稚園に近づくにつれて、五人の子どもたちの表情からは笑いが消え、はずむような緊張感には重苦しさが加えられて行つた。おとなの方でも、たくさんの濃紺の制服と、林立するおとなたちの中に、自分たちの子どもが巻き込まれていくのを見て、しっかりと手をつながなければならなかつた。

クラス編成が知られ、それまでガッチャリつながっていた子どもどうしの汗ばんだ手を離れさせて、母親たちは自分の子どもを、各々のクラスの部屋に連れて入つた。

混雑した部屋に入ると、Hは多少上気しながらブスッとして、部屋で遊んでいる子どもたちを見ている。私は、四十一名の子どもにたつた一名の保育者が関わることを知つて不安だった。こんな大勢の中で一体何が育つのか。一人一人の子どもを大切にできるのか。……止めどもなく心配であつた。Hに話しかけてもシロッと見るだけであり、私は気が重くなつていつた。

さてこのクラスのT先生の指示で、子どもたちが親と離れて、部屋の前方に並べてある椅子にすわることになつた。当然の事ながら、親と一緒にいたくて泣く子たちがいた。その中でもSちゃんは特別大声で泣き始めたので、他のおとなも

子どもも、みんなSちゃんの方を注目した。Sちゃんの声がガラスをぶるわすほどになつた時、T先生は小さいけれどよくおるソプラノで「おばあちゃん！ Sちゃんのそばにいて下さい」と言つて自ら椅子を運び、Sちゃんの隣へ置いたのである。おばあちゃんが隣にすわつて、Sちゃんの泣き声はピタリと止んだ。子どもたちは「フツ」と息をつき、おとなたちは、改めて衣服のみだれが氣になり始めた。Hは食い入るようにSちゃんに注いでいた視線を、T先生に移していく。私は子どもたちがこれから一年間つきあう先生と、素敵なかな出会いをすることができたことをうれしく思つた。

K子ちゃんはHとは違うクラスだが、先生と素敵なかな出会いをすることのできた一人である。それは入園式が終つて間もなく、K子ちゃんが水疱瘡にかかつて、長く休まなくてはならなくなつた時の事である。「始まつたばかりなのにー」と言つてK子ちゃんもお母さんも、すっかりショゲていた。そこへ先生からお手紙が届いたのである。それも毎日々々その日にあったことを、絵と一緒にお便りして下さつたのである。K子ちゃんは手紙を渡されると、ベッドとあかるくなり、すぐ自分でも手紙を書き始めた。その喜び方はお母さんが、「病気になつてよかつたねー」と心から言うほどであった。

けれど、先生と素敵な出会いをした子ばかりではなかつた。Y君がたまたま「一日入園」の日にお母さんから離れるのが寂しかった時に、一緒に遊ぼうとした先生が手をひっぱつてしまつた。Y君はワンワン泣いて、幼稚園へ行くことをひどく嫌がるようになつてしまつた。幼稚園へ行つてもその先生を見ると、恐怖に近い表情でひきつたように泣いた。そんな日がしばらく続いたある日、仲良しのT子ちゃんは幼稚園から帰ると、ふだん着の上から再度制服を着込んで、Y君の家で遊び始めた。「T子ちゃん何してるの?」と尋ねると、「幼稚園ゴッコしてるのよ。だつてYちゃん幼稚園いやでしょ、だから……。今幼稚園へお出かけするの」と答えてくれた。こうした仲良しの力が幸したのか、Y君は入園後十日もすると、泣かずに出発するようになつた。ただ、二か月たつた今でもやつぱりその先生をこわがるようである。

入園後一週間ほどは、バス通園が行われず、幼稚園への送り迎えは母親の役割だった。Hを含めた五人の子どもたちを、私ども母親のうち二人が交代で送り迎えた。子どもたちは、行きと帰りではまるで別人のようだつた。朝は、泣きべそをかきながら、母親の手をしつかり握つて歩く子、手をつ

ないでいる相手の子が不用意に手をふりまわすと「僕はH君と手をつながないよ」とイライラする子、「アーンK君手をつながないって」と泣く子、「H君私と手をつなぎますよ、K子ちゃんK君と手をつなぎなさい」としつかりしたところを見せる子、誰と手をつなごうがサッサと幼稚園へまつしぐらの子、みんな朝は個性的に緊張していた。こんな子どもたちが帰り道では、お母さんにどなられても犬に吠えられても、道路にねころがり、^{おまわり}を見つけ大騒ぎした。帰り道は、帰るというだけでのびのびと笑いたくなるようであつた。

バス通園が始まつてしまふると、子どもたちは「幼稚園へ行くことが当然」といつた表情で出かけるようになつた。そうした安心した様子が見られるようになつてきた頃やつとHは、幼稚園で見たこと聞いたことを話してくれるようになつた。

はじめのうちの話す内容は、もつぱら保育活動の中でも課題活動のことだった。

。「今日お遊戯室にみんな集まつたの、園長先生お話してくれた。おサルと狩人の話だよ。おサルのお母さんと……」「いーとーまきまき」とお遊戯と歌を実演して見せてくれ

る。

。「こいつのぼり作ったよ。僕田中先生が言つたとおり切つて
のりではつたよ」

このころは、私が「どんなお友だちいるの?」と尋ねても

「知らない。いない」とまるで興味のない様子であった。

バス通園が始まつて十日ほどたつと、帰宅後衣服を着替え
ながら、

「ママ、今日、バスが揺れたら、C君の足と僕の足がく
ついたみたいに一緒にピヨン! て飛び上がつたんだよ
ーー、どうして?」

と一気に言つてズボンもはかずにはわり込み、足を上げてみ
せる。友だちと出会つた子どもの興奮ぶりにどぎまぎしながら、
母親としてうれしい思いをした。

このことがあってから、Hが帰宅後話す友だちの話題が、
少しずつ増えていった。ここにそのいくつかを紹介したい。
○「N君ね、指のここに怪我したの。T先生赤チンつけてく
れたよ。そうしたら僕もこの指痛くなつて、T先生に赤チ
ンつけてもらつたんだよ。どうして?」

○「Aちゃんね、僕のことこうするよ(自分のシャツをギュ
ッとつかむ)。それできたなーい顔して僕にこうするの(母

の顔のすぐ前に自分の顔をえる)。ね。僕、Aちゃんに見
つからないように隠れていたの」

○「Mちゃんね、僕のことダーリスキなんだ! 僕バッヂ忘

れたら、僕に“バッヂ無いよ”って教えてくれたあ」

○「今日M君とC君と森で遊んだよ。M君とC君は、昨日は
仲間じゃなかつたけど、今日から仲間になつたんだ。僕が
泣いても助けてくれたんだ」

○テレビを見ていて「アア! アア! アア!」と言つて足
をたたく。「この歌だ! この歌だよ。B君いつも歌つて
るの。B君この歌歌つてたんだー!」と言ひ、一緒にテレ

ビに合わせて歌い始める。

○「Y君今日幼稚園で泣いてた。僕そばにいてあげた」

そしていつの間にか帰宅後も同じクラスの子どもを家に連
れてきたりするようになつた。「ここの僕のうちだよ。あれ僕
のママ」などもつともらしく紹介し、自分のおもちゃを出し
てきて、説明書よろしく使い方を教えるのである。

こうして、先生や友だちは気ついていく反面、Hは幼稚
園にどんな遊具があるかについては、この二ヶ月間殆ど話を
しなかつた。僅かにこんなことがあつただけである。

○夜いつまでもごちそう作りに余念がないので、母が「あし

たまた幼稚園で「ごらう作つたら？」と口を出すと、Hはハッとして「幼稚園にまよい」とあるかな？あるかねー？あるね、あるねきっと」とやつと気がついた様子であった。

母親としての私にとっては、入園以前の子どもの動き方、四月からの、家庭とその周りの地域のつながりを基盤とした子どものあるまい方、地域性がより拡大した幼稚園場面での子どものあるまい方、各々が新しいものであつたし、それは母親としての私と、新しい子どもの出会いでもあつた。そしてそれは、子どもにとつても各々の場面で異なつたふるまい方をする自己との出会いでもあつたようである。

○入園して間もなくは、「僕、幼稚園で何もしないよ」と言つていた。

○しばらくすると「僕、先生が何しても良いって言う時、何もしないんだ」と言つてフツと寂しげになる。

○最近も、「僕、先生が何かしなさいって言った時はやるけど、後はやらないよ！」とボソリと言うのである。

全く「しらけ」てしまうようだ。家庭では夢中で遊んでいるこの子がしらけるなんて、と不思議に思える。つい昨晩も、おとながお風呂から出てしまつた後、十五分間も一人で「僕

は小人だよ！巨人の靴をみがくんだ！」と湯舟を磨いていた子とは思えない程である。これから先、幼稚園でも心から楽しんでいる自己、喜んでいる自己と出会つてほしいと願わざにはいられない。

ともあれ、二か月前までは、自分の家のことを「ママの家」と呼び、「ママの家」からは一歩も一人で出ようとしなかつた子どもが、「僕の家」と呼び、園から帰宅後、おやつを口に入れながら、友だちの姿を捜すようになつていったことは、本当に嬉しいことだった。祖母のふところの中で貯えた生きる力が、家庭と地域社会の中にしっかりと根を張り、幼稚園での新しい人や、物や、自己との出会いといふ肥料を得て、のびのびと育ち始めたと見える。エゴの木の真白な花の散る下で「雪やコノコノ」を歌う子どもを見るにつけ、森の中から棒をふりまわす子どもたちの歎声を聞くにつけ、今始まったこの「家庭」と「地域」と「幼稚園」の三者のチームで行なわれている保育活動を、なんとか実りあるものに育てていきたいと思う、今日この頃である。

幼児と音楽



神の子
礼子

はじめに

「幼児と音楽」というテーマは、日頃子どもたちと接触し生活なさっている皆様には、それぞれ関心がおありのことと思います。

☆子どもの情操を高めるためにも、早くからピアノやバイオリンの音楽教室に通わせた方がよいでしょうか。

☆幼稚園の先生になつたけれども、ピアノは下手だしうたにも自信がないので、音楽の指導には困っています。

☆自由に遊んでいる時の子どもたちは実に生き生きしているのに、いざ音楽の時間になると生き生きした様子がみられないのはどうしてなのでしょう。

こんな疑問や悩みをお持ちになつたことはないでしょうか。その答えをさぐるには、人間と音楽のかかわりについて、根本的に

（音楽というものは果たしてあるのか）

——芸術から芸能への転換——

一般に音楽とは、「音による芸術」とか「時間芸術」とか言わ

れていますが、人間が音で楽しんでいる時、音以外の要素は関係していないと言えるでしょうか。音と聴覚とを使っていることはいうまでもありませんが、人間には同時に視・嗅・味などいろいろな感覚器官が働いていることを否定できません。

音楽ということば、すなわち「音という单一の情報媒体をつかう芸術」という分析的で抽象的な概念は、文明開化以前の日本にはなかったものです。いいかえれば、西洋文明が輸入されるまで、わが国には“音楽はなかつた”ということです。さらに日本ばかりか、西洋文明圏以外のどの民族にもなかつたのです。

事実、諸民族の芸能をひらく見わたすと、歌、踊り、語りなどの要素を融け合わせて、音楽とも舞踊とも演劇とも名づけようのない渾然としたものへと発展させ、磨き上げていく傾向があります。日本では、「能」や「歌舞伎」のようなものがそれにあたります。こうしたやり方は、人間の感覚系のでき方にあつた、多元的で総合的な情報活動といえるでしょう。

ところが、西洋文明だけはこれに逆行して、純粹芸術主義の名のもとに、情報の伝達を音という单一の媒体のみによつて行ない、もっぱらその媒体を磨き上げていくことをもつて発展の方向としてきました。音楽、演劇、……さらにその枝、葉というように、人間の楽しみを情報伝達の媒体や手法別に切りきざみ、無数

の専門家の手で、その破片のひとつひとつを磨いてきたわけです。この、人間の特性を無視したやり方によつて、どれほど人間が苦労し、楽しみを奪われてきたか計り知れません。

音楽という狭い、分析的で抽象的な概念にとらわれることはもうやめましょう。地球上の民族の生活や芸能に容易に接する機会に恵まれるようになった現在、世界の諸民族の芸能を偏見なく理解し、楽しむ道はすぐ目の前に開かれているのです。

〈樂譜の限界〉

—音楽イコール樂譜ではない—

私たちは、音楽の時間にはもっぱら西洋音楽を教育されてきましたから、樂譜とのつきあいは相当長いわけです。なかには、樂譜をよめないばかりに音楽がイヤになる人もいます。しかし、樂譜をよめることと、歌をうたえることは何の関係もないことです。樂譜をよめない田舎のおじいさんが、その渋いノドで民謡をうたい、聞く人を感動させる事実には誰も異論はないはずです。

西洋音楽では、そのなりたちを考えてみると、その根底に音楽はつねに樂譜に書きあわせるものだという大前提があります。音楽イコール樂譜なのだから、逆に樂譜を忠実に楽器などの“音”

に変換すれば、そこに音楽をつくりだすことができると考えられてきたわけです。

このような変換の可能性がたりたためには“音”的方に次のような条件がもとめられます。すなわち、楽譜で示された音程を正確に再現できるよう、①その高さが人間の耳に明確に判断できること②音色やひびきが高い音の時も低い音の時も、強い時も弱い時も等質のものであること③一つの音の中で高さやひびきや強さが時とともに変化してはいけないこと、です。この条件にかなつたものが“樂音”であり、そうでない（したがつて音譜であらわせない）ものが“騒音”として区別されていることは衆知のところです。

このことは人間の声にあっても例外ではありません。これらの条件をそなえた声として磨き上げてきたものが現在のベルカント発声です。ベルカント発声は西ヨーロッパに土着の発声法を出発点としながらも、先にあげた西洋音樂の体系の要請にもとづいて必然的に生まれたものといえます。

ではこのような西洋音樂の音のモノサンを現実にある音樂のすべてにあてはめるができるでしょうか。例えば日本の尺八の音。これはご存じのようにただ一つの音の中できえ、はげしくたえまなく変化することで言うに言われぬ深い情感をただよわしま

す。このような音の連続的、瞬間的変化こそ、日本の音樂を特徴づけている強力な表現上の武器なのです。

ことに重要な声について考えてみましょう。声は本来、ひびきや高さの点でも、また瞬間的連続的変化においても、樂器の音よりもはるかに思いのままになり、それによつて多様で複雑な表現が可能なことに気づかなければなりません。

ひびきの点でベルカントとは全く異なるニグロのハスキーボイス、装飾音符を使っても書きあらわしにくい日本民謡の小ぶし、あるいは音程のつかみようがない叫び声（叫び声が見事な音樂を作り上げている例は多いが、バリ島の「ケチャ」をきいた人はその人間性と芸術性の高度な融和に驚くでしょう）等、いずれをとつてみても、ベルカント的発想によつてその音の実体のすべてを樂譜という抽象的な媒体に変換することは、不可能に近いと言わざるを得ないでしよう。

このように、樂譜という手段では、言い換えれば、これまでの西洋音樂のアミの目では、現実の音の氷山の一角しかすくいとることができないのです。

「おわりに」

私たちは何のために音樂をし、あるいは子どもと音樂をしてい

るのでしょうか。ごく少数の人を除いては、専門家になるために音楽をしているわけではありません。

今の世の中は専門家社会で、他のことはともかく、ある一面の能力が優れていればいるほど認められるしくみになっています。

音楽においてもこの傾向があり、技術的には幼少時から長時間練習した人が勝ち、技術的にうまくなければ音楽を楽しめないとなると、人間は音楽の練習のためにありまわされてしまします。一日三時間もピアノの練習をしなければならないという状況は、子どもの人間全体としての成長にとって、きわめて不自然で有害なことと言わなければなりません。前にも述べましたように、芸術から芸能へと価値の転換をはかることによって、人間と音楽の好ましい関係を創り出せることを確信しています。

- 小泉文夫 「おたまじやくし無用論」 いんなあ・とりつ・ぱ社
- 小泉文夫 (解説) 「世界の民族音楽」 NHK FM 毎週火曜夜
10:20 ~ 11:00

れていくかは、先の問題として残されています。

参考になる書籍・文献・その他

- 山城祥二 「音楽というものは果たしてあるのか」 合唱団「ハトの会」 第17回定期公演プログラム (一九七三)

- 山城流口伝控から (そのI) 「ベルカンント圈脱出の秘策」 芸能山城組 「ハトの会」 第19回定期公演プログラム (一九七四)

「芸は人間総体のあらわれである」 芸は人間総体のある一面であり、同時に総体の反映でもあります。一芸にひいでることは、同時に芸以外のその人の人格全体も磨かれなければならない性質のものと言えるでしょう。

幼児と音楽の問題を論ずる上で、子どもに接する私たちの音楽観が、子どもに反映することは言うまでもありません。私の実践は、現段階では私と同年代の人たちによって創られています。今後子どもたちの中に入った時、そこからどういうものが創り出さ

(聖マリアンナ医科大学ことばの治療室)
芸能山城組 「ハトの会」

岡先生とおはなしえほん——岡政先生を悼む——

後藤千枝

去る三月二十一日、雨降りの日でした。

このお話をほんを岡先生に見ていただいたそのときのおことはのはしはしを思い出しながら、私の心に残っていることを記させたいだきたいと思います。

岡先生は、二日程前に、植木の刈りこみをされて身体中が痛く、ベッドでお休みでした。でも、このえほんはベッドに起きてみせていただきたいとおっしゃって、長い時間をかけ、やっとお坐りになり、押しのいたくように話の内容や絵を見てくださつて、四歳児なりの着想や表現の動きを、涙ながらによろこんでくださいました。

ひ孫さん（あやちやん・三歳）の絵も若いおばあちゃんが持つてこられ、いつしょにみせていただいたりして、幼児期の成長についてつづることなくお話をはずみ、聞かせていただいたり聞いていただいたりしていますと、幼稚園教師の生き甲斐やよろこびを味わい、自分のほこりにすばらしい満足感をもつたひとときでした。

四月になつたら、出石幼稚園に遊びに行かせていただきますからと申され、その日を楽しみに……。「先生！　もう木などせんていしてはいけませんよ。足腰たてなくなりますよ」きびしいことばを後に、そして、先生によるこんでいただいたよろこんびにひたりながら帰宅いたしました。

この日、このときが永遠のお別れになるとは、夢にも考えられないことでした。美しいお写真をみておりますと、優しいおことばで、暖かい声で話しかけてくださるようで、おなくなりにならぬのではない、きっと生きていらっしゃるかもと思われてなりません。

お話をほんについて「このような絵本つくりは、市内の先生たちだけでなく、全国の先生たちに知らせてあげねば惜しい。ちょ

うど幼児の教育から原稿を頼まれていて、これを紹介して書かせて「いただこう」とおっしゃって、このえほん作成での感想や苦労したことなど書き出してみてちょうだい……と申されました。

このえほんの内容を確かめるかのように、ひとりごとのようでもあり、また、私への再確認と、課題を与えるようにも思われて、御年九十歳だったとは考えられない才知と、暖かいおか様のような慈愛につつまれたあのひとときを思いかえし、感謝と、別離と、果てしない教育愛をかみしめる毎日でございます。

先生のおことばのはしはし！

「幼児が直接生活していればこそ、このお話をでき、幼児をたいせつにしている教師の暖かい心があればこそ、学級でのお話をえほんに作られ、またひとりひとりにまで与えてやることができたのでしよう」

「ひとりひとりに与えられ、家庭へ持ち帰つてからは、親の指導にもなり、幼児をみなおして、豊かな生活へつながっていくでしょう」

* * * *

おはなしえほんの内容について

おじがなる牧場へ園外保育（虫とり）に出かけ、虫との生活か

らその過程で、またむすびで、例年のようにお話をくりをしておりました。虫とり生活の中で、出石幼稚園独特の味わいのようなもののが出てくるのではなかろうかと、ひそかに期待していました。身近な生活（交通戦争の環境とか、当時の工事の現場、自分の心の中のものなど）が、虫の心の動きとなつておりました。四歳児の着想はきびしいものとすばらしい想像が表われているのにおどろき、このような芽を表現させてくださった組の先生方に頭のさがる気持ちでいっぱいでした。

ひとりひとり各自で絵をかいてお話をえほんにする経験は、今までしており、また、クラスで紙芝居的なお話をくりはしておりましたが、一冊のえほんにまとめ、ひとりひとりに与え帰してやりましたのは、はじめてでした。

装丁について

印象深かった場面を最初、クレペスで描いておりましたので、それを教師がファックスへかけるため、マジックで写しなおしたり、大きい表現を縮めたり、体型にまとめるのに苦労しました。

幼児の絵には動きがあることを、今さらのように理解することができ、なんどなんど描きなおし、楽しんだ気持ちで描いて、やっと少しでも幼児の線に似たような動きになつたと、ひとり満足いたしました。

（岡山市立出石幼稚園）

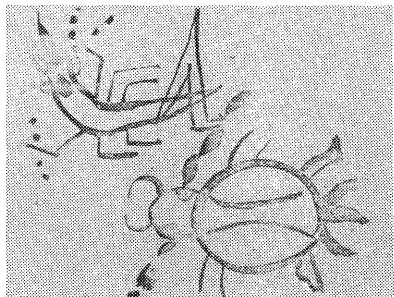
おはなしえほん

こおろぎとばつた

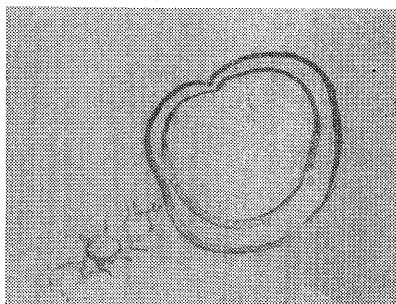
つぎたした絵などで、紙芝居の
ように表現され、大きく描いて
いた。それを縮少し、墨絵にか
いてみた。

4歳児・昭和49年10月制作

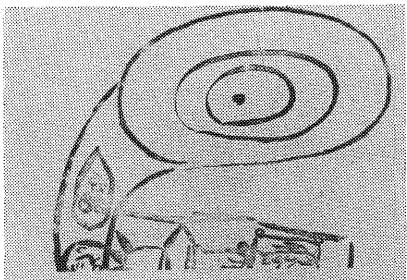
岡山市立出石幼稚園



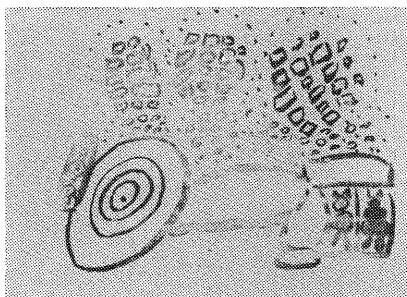
ようちえんへ
あそびに きていた
こおろぎと ばつたは
おやまへ かえりたくて
なきだしました。



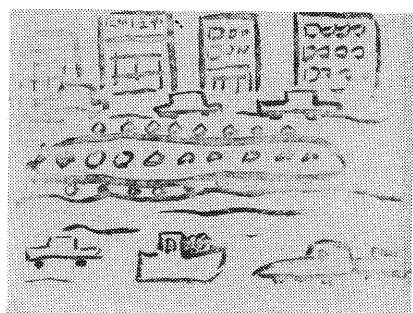
ようちえんの そとは
くもが はしっていて
あぶない から
ちかを とおつて
かえることに しました。



あなたをみつけて
はいって いきました。
どちらに おおきな
いしが ありました。
もぐらさんが いしを
のけて くれました。



だんだん あなへ
もぐって いくと
ふたつ あなたが ありました。
ひとりのあなたに あかおにと
あおおにがいて
びっくりしました。
もうひとつには ダイヤモンド
がありました。おみやげに
もつて かえりました。



あなたのなかから そとへ
のぞくと おかやまえきが
みました。しんかんせんも
はしっていました。
たかしまやも みえました。
トラックが はしってきましたので
のせてもらつて
おやまへ かえりました。

心の芽

後藤 千枝

十一年三月卒業、同四月、岡山女子師範学校（現、岡山大学教育学部）附属幼稚園へ主任保母として赴任されました。

自分自身も 知らない
教師も 知らない 心の芽
あの子 この子 それぞれに
いつの間にか どこかで

染めわけられていく 心の芽
人 物 自然とのふれあいで
いつの間にかどこかで

形つくられていく 心の芽
あの子 この子 それぞれに
吹雪にもたえ しつかりと 伸びよう 心の芽

教師は みなおそ
たいせつに きびしく （おはなしえほん より）

岡先生のこれまでの歩み

岡先生は、明治二十年岡山に生まれ、四十年四月、東京女子高等師範学校（現、お茶の水女子大学）保育実習科に入學し、翌四

二、三年ごろから、子どもの遊具として自由に使わせました。
このように、子どもの自由な活動、自発性、子どもの生活を中心にして、外からの形式的な束縛をなくそと、次々と実践に移されたのでした。時間に縛られない保育、場所に縛られない保育（組を廃し、子どもに全園を開放しました）、子どもの生活中心の保育に向かつて、お若い情熱で体当たりされたのでした。

（幼児の教育 72巻8号 P32
松川由紀子「岡政先生会見記」より）

マリアさんを再びお迎えして

三年前の“幼児の教育”誌に、“私のオブザーベーションズ”と題した文を寄せられ

メリシコのお土産から

た、メリシコの幼稚園の先生マリア・リ・ベナビデスさんを記憶の方も多いと思ひます。そのマリアさんが帰国されて以来二年ぶりで来日されました。ちょうど同じころ日本に来られたエリザベス女王を上回るぐらいのハード・スケジュールの中を一日、私は渋沢丘陵の周郷先生のお宅へ一緒に、楽しくかつ意味深い時をすごしました。相變らず、短かい時間にまことに深くすべてのことを見、かつ感じとられ、またそれをできるだけ的確に私たちに伝えようとしたマリアさんの人柄には、今さらのように心打たれました。

と割合に軽いので、何でできているのかとうかがうと、素焼のようなものをしんに、上に毛糸をまきつけてあるのだそうです。その毛糸の黄、赤、緑を基調とした色合いが、何ともいえず美しく、ちょっと日本人には真似のできないものです。そして手に持った感触も、毛糸のせいでしょうか、いかにも手作りといった、あたたかい感じなのです。そして私にも、赤と黒と白の糸で織られた四センチ幅くらいの、よくメリシコの民族衣裳に見られる、ベルトをくださいました。その上、娘たちにまで、メリシ

コのハンド・クラフト製品をくださいました。そして“traditional”(伝統的)であるということを熱をこめて強調されるのです。“日本のこういうものはどうなつてゐるのか”との質問には、やつと近い民芸品ブームなどといわれ出してきたばかりの現実を思つて、私たちは恥ずかしい思いをついていらっしゃいました。手で持ち上げる

しました。

周郷先生は、たまたま昨日先生を訪ねていらしたヨハネス・ブッシュさん(故ブッシュ・孝子さんのご主人)が、先生の島に咲いたばらのにおいをかいでもにおわないとおっしゃった話をされました。東京のいろいろの公害(薬品とかガスとか)で鼻がきかなくなつたとヨハネスさんはいわれたそうです。そして日本人は smell of human をも失つたのだともいわれたとか……悲しい現実です。

そして、ブエノスアイレスは空氣の美しさのところ、東京はマロ・アイレスだとスペ

イン語で先生がおっしゃると、"周郷先生、よくスペイン語を覚えていてくれたからね)" とマリアさんは目を輝かせていわれました。

" とマリアさんは目を輝かせていわれました。" とマリアさんは目を輝かせていわれました。

不思議な日本人

マリアさんは、たたみかけるように、"周郷先生、教えてください。日本人は1つの生活をもつていてます。1つは home life やう1つは working life です。

これはどうしてですか?" と聞かれるので、この二つを使っているのが日本人で、マリアさんのような純粋な方にはどうして理解できない点なのでしょう。深く反省させられました。

また、マリアさんのお友だちマルタさんは、今回が初めての日本訪問なのですが、日本について印象の強かつたことは、"日本人に表情がない(表現が貧しい)" ことだともいわれました。

先生はこの日本人の working life は mechanical life に通じているのであって悲しみぐさないとだとおっしゃいました。それ

に対し、マリアさんはマルタさんも "メキシコにも都会には mechanical life がある。しかし日本とメキシコでは back ground が違うので現われてきたものも違う" という意味のことをおっしゃいました。

先生は話題を変えられ、マリアさんが日本に留学中、マリアさんのお父さまが日本から来日された時、羽田空港でマリアさんが本当に流れるような涙で迎えられた、それが非常に美しく感動的だったと話されました。今の日本人は泣くこと、涙を忘れました。今の日本人は泣くこと、涙を忘れ、子どもさえあまり泣かなくなつた

こと、マリアさんは、"私はすぐに cry cry なのだ" と笑われました。そして自分は韓国系であるせいか、非常に東洋的で、日本は大好き、日本の食べ物も……天ぷら大好き、日本のお茶も"といわれました。けれども家族の中でもうふうな東洋的なのは自分だけだと。

それからマリアさんは色の美しい一冊のぬり絵本を見せてくださいました。それはメキシコで初めて出された数学のための幼児用の絵本で、マリアさんやマルタさんのグループで作られたのだそうです。そして教師の手引きのようなものもちゃんとついています。数学といつてもいわゆる数ではなく、まず大きい小さい認識で、そこにはいろいろな動物が、あるいは親子の形で描かれ、またちがつた動物が対象的に大きなもの(ゾウなど)小さなもの(カメなど)といったふうに描かれて、大きいものにはマルをつけ小さいものにはバツをつけるというものです。しかしこれでもマリアさんが強調されたことは、この絵本だけで教えるということはしない、必ず実物を見

たり、さわったりすることと平行して行う
ということです。

簡単な形、三角、正方形、長方形、円と
いった形の認識も出てくるのですが、そこ
でもまわりを見回して、窓は正方形、ステ

レオ・プレーヤーは長方形、といったよう
に指さして、こういうふうに实物と一緒に
教えるのだと重ねて、いわれましたが、口先
だけではないその熱の入れ方には感心させ
られました。

日本の教育は知識ばかりを詰込んで、イ
ンスターントに mechanical life に役立つ人間
を養成していると先生はいわれてから、や
はりヨハネスさんが、日本の子どもたちに
玩具を与える親たちに、一言もの申し
たいといわれたと話されました。するとマ
リアさんも“日本の玩具は実にたくさんあ
つて、よくできている。しかしちょっとネ
ジをまいたりスイッチを入れれば easy に
せわしく動き、音をたてる”と身振り手真

似をませてユーモラスにいわれ、一同大笑
しました。要するにこういう玩具では、
子どもの創造性も自発性も育たない、とい
うことではないでしょうか。

中国のこと

いいで、奥さまお心づくしの天ぷらでお
昼をご馳走になり、いよいよ、一番先生が
期待していらした、マリアさんの“中国見
たまま”をうかがうことになりました。

今回のマリアさんの中国行きは、旅行者
として行かれたわけで、その意味で、招待
されて訪問した人たちの印象とか報告とは
大分違った、興味深いことをうかがうこと
ができました。

中国のいいところと悪いところ
中国の田舎は、景色は美しいし、働く人た
ちは、朝から晩まで非常によく働いて、そ
れは大変いいと思った。しかし中国の人

は、決して一人で行動しない、必ずグル
ープで行動していた。

旅行のスケジュールはおおよそのことは
メキシコの旅行社の方で決っていたが、た
とえば細かい毎日の予定、宿泊の場所など
は、すべて中国側が決定するらしく、中国
に行くまで、何もわかつていなかつた。そ
して一日に四つも工場見学（刺しゅう、象
牙細工など手工芸品の）がある。行きたく
ないようなようすをすると“それならあな
たは病氣か？ 病院へ行つた方がいいので
はないか”といわれる。すべて何か政府の
管理下に行動させられたという感じだっ
た。工場へ行くとちゃんとスペイン語で二
十分から一時間も、グループの中の一人が
説明をしてくれた。これもまた非常に統制
されているような感じだった。

彼らは“China is the best.”といい、何
事によらず中国独自で開発したものであつ
て、外国のものはとりいれていない、とい

う。しかしみんな語を話すということは、矛盾しているのではないか。

そして一様に、革命以前の中国人は貧しく暮らしをしていた。しかし今は違う、田舎でさえも衣食住に困らない生活をしているといふ。毛沢東さえも一般人民と同じように戦っている。これは事実で、経済的にはすべての人が平等である。

また、毛沢東以前は中国人は孔子をあがめ孔子の教えを守った。しかし今は、中国はキリスト教國ではないので神をもたない、そのかわりに毛沢東を神のように思つてゐる。

中国人は、一人で行動しないといったが、私たちも一人歩きは禁じられ、町を歩く時もグループで歩いた。するとまわりにすぐ人垣ができる、見世物のよう見られた。そして主に私たちの着ているものが珍しがられたようだ。なぜならば中国人たち

は皆同じもの（人民服）を着てゐるから……。そして反対にちょっと中國の人々に近づくと彼らはサッと身を引く。けれども二十年以上も旅行者を国に入れなかつた中国であるから、現在二十歳の青年であるといふ。外見を見るのは初めてであるわけだ、無理のないことだと思った。

経済的なこととなると、いわゆる手工芸品はとても高価で、中国人には買えないぐらゐである。でもこれは、そういう品々がない沢品で中国人は必要としないのかもしない。給料生活者のサラリーハは本当にわずかで、三十ジュアン（元）＝十五ドル、しかしほぼ三D.K.の住宅の家賃が二ジュアンド、食物、衣類すべて生活必需品は安い

ので暮しには困らない。そしてこの住宅もやはり一家族が孤立して住むというのではなく、中國中どこへ行つても community (組織) を作つて暮している。そこには病院、学校、保育所（幼稚園ではない）等の

施設が完備している。そして婦人はすべて働く、この働く場所も、それぞれの community の中に組織的に作られている。

中国について、いいと思ったことは大学のこと、一人の青年が高校を卒業して大學で勉強したいと思つた場合、決して個の意志では実現しない。その community の人たちが、彼または彼女が大学へ行って勉強し、将来また戻ってきてみんなの役に立つ人間であるかどうかを認めてくれない

かぎりは大学へ行かれない。メキシコでは誰でも望むものは大学へ行かれる。しかし卒業する者はほんのわずかである。この無駄にくらべれば中國のやり方はなかなかいいと思つた。

ここで周郷先生が、日本では大学へ入った者は大体一〇〇パーセント卒業できる。そのかわり入学試験が非常に severe であると話され、マリアさんが目を丸くして“一〇〇パーセント？”とびっくり

なれる一幕がありました。

このほか、思い出したこととしては、都
会では一匹も犬がないなかったということ。
それからずっと南、広東へも行つたが、そ
の人们はちょっと北京や何かの人と違
つて、白い服を着ていた。暑いせいか、ま
たホンコンなど外国との接触があるせいか
かもしれない。

ともかく一言でいえば、中国の人たちと
中国は、非常に political (政治的) である
といえる。そして中国の一番大きな間違い
は、彼らが “China is the best” といい、
そう信じていることだと思う。

マリアさんはこのほかにもいろいろ、シ
ョッキングなこともあつたと話されました

が、終始表情豊かに、時に少女のようなし
ぐさで、私たちに話されました。私が考え
ていたより中国に対する積極的な好感はも
たれなかつたようです。でもこれは、その
前の雑談の時に先生が “第二次世界大戦後

の日本” といわれると、 “日本は一つもそ
んな大きな戦争を経験したのか、メキシコ
はそういう経験はもつていらない” とても

びっくりしたようにいわれた、そんな、国
の歴史の違いなどにもよるのかもしれませ
ん。とも角、私にとって、非常に貴重な、

そして楽しい時をもつことができました。

二日後にはまたメキシコに帰られ、今度は

五年ぐらいたたないと再び日本には来られ
ない、とも角日本へ来るのには相当経費が

かかるので……と “周郷先生、きつと、メ
キシコへ来てください” とボロボロ涙を流
して先生のお宅をあとにされました。(赤

(一九七五・五・一九)
間記)



幼児の教育 第七十四卷 第九号

九月号 © 定価200円

昭和五十年八月二十五日印刷
昭和五十年九月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼 津 守

発行者 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座 東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

“ちびくろさんぽ!!”

“さあ、どんなお話をかしら!?”



発売以来大好評!!

大型絵はなし

A全判(59.4×84.1cm)
監修 東京・道灌山保育専門学校校長
道灌山幼稚園園長
高橋系吾

新しいお話を仲間入りして、いつそう楽しくなりました。



●にんじんはなぜあかい

文・高橋系吾 絵・中村千尋
12・単色 (表紙のみ多色)
2,800円

●あんばんまん

文と絵・やなせたかし
12枚・多色
4,000円

●交通安全絵はなし

どうぶつのくに
企画・東京交通安全協会
絵・山本 等 12枚・多色
4,000円

●ちびくろさんぽ

文・高橋系吾 絵・はらじん
12枚・多色
4,000円

●やさしいライオン

文と絵・やなせたかし
12枚・多色
4,000円

●ありのぼうや

文・高橋系吾 絵・中村千尋
11枚・多色
4,000円

●ないたあかおに

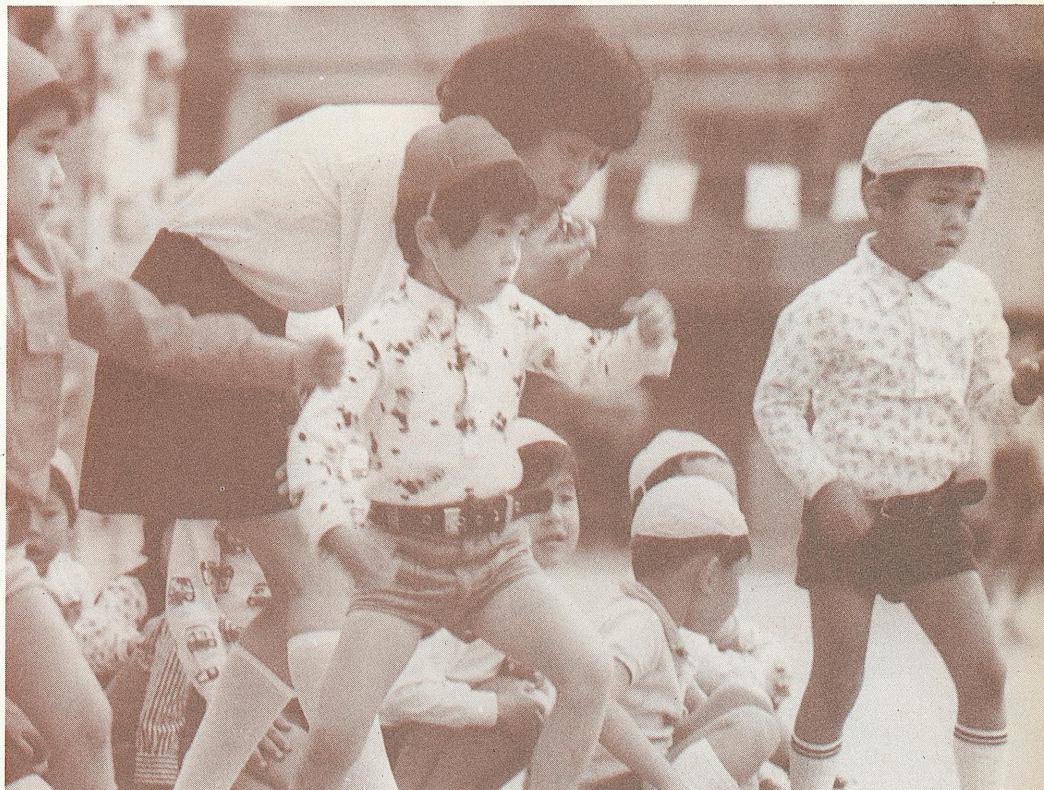
文・浜田広介 絵・黒崎義介
12枚・多色
4,000円

●さるとかに

文・高橋系吾 絵・中村千尋
12枚・多色
4,000円

*スチール製スタンド 2,900円

“位置についてエ、ヨーイ…”



フレーベル館の運動会用品

● 大玉・(紅白) (1個)	14,400円	● キンダー6色円塔 (6本1セット)	10,000円	● エッグボール	750円
● 大玉・空気入	3,000円	● キンダーカラーフープ (6色1セット)		● 紅白帽子 (1個)	220円
● バスケット台 (紅白2台1セット)	18,000円	" (特大)	3,400円	● 色帽子 (1個)	350円
● ネット (紅白2枚1セット)	2,000円	" (大)	3,000円	● ライン引	4,000円
● ポンプ (ドッジボール、サッカーボール用)	1,300円	" (中)	2,700円	● 卷尺 (30m)	3,400円
● 綱引ロープ (30m)	19,000円	● キンダーカラーボール (大)	600円	● 等賞旗 (1~5等1セット)	2,500円
● ファニートンネル	12,000円	" (中)	540円	● 万国旗 (20枚1セット)	4,700円
" (T字管)	12,800円	" (小)	170円	● 紅白旗 (紅白2枚1セット)	400円
" (Y字管)	13,800円	● キンダードッジボール (6個1セット)	5,600円	● 旗立台	950円
● キンダー6色バトン (6本1セット)	1,600円	● キンダーサッカーボール (3個1セット)	3,800円		

——くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。——